

506

17

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 ¹⁹/₁₀ 1 2 3 4 5

始



506-17



義

經

物

語

巖谷小波著

大正
11. 2. 20
内交



はしがき

源九郎義経！ 何といふ懐かしみのある名でありませう。私がやうやく十歳か十一、はじめて自分で本が読めるやうになつて、はじめて好んで讀んだ本は、すなはち義経の物語でありません。

一昨年少年少女のために、新に「譚海」が出るに當つて、端無く當年の面白さを思ひ出し、やがて當年の氣分になつて、稿を起したのが、この義経物語で、同誌上に一ケ年間連載したものでした。

但し、當時愛讀したのは、義経勳功記といふのでしたが、

この義経物語は、主に義経記に據つて執筆しました。蓋し義経記は、義経のことを書いた物の中の、一番古く一番名高いものでありますから——。そしてその原文の中でも、少年少女に適しくないと思ふことは、なるべく省いたのであります。今度一冊に纏めるに當つて、源平盛衰記から、面白さうな所を取つて、新たに書き加へました。それから、附録にしました「一の谷」は、嘗て少年世界の増刊に發表したものです。その詩になつてゐるのが、また一興と考へて再録しました。

一月十八日

巖谷小波

見出し

第一回	鞍馬の巻	(一)
第二回	奥州下りの巻	(一六)
第三回	鬼一法眼と湛海坊	(三〇)
第四回	辨慶太刀取の巻	(四四)
第五回	頼朝義経對面の巻	(五八)
第六回	宇治合戦の巻	(七三)
第七回	屋島禮の浦の巻	(八五)
第八回	堀川夜討の巻	(九七)
第九回	義経都落の巻	(一〇八)



義經物語

第一回 鞍馬の巻

時は今から七百年ばかり前のことでした。保元だの平治だのと云ふ年號の頃は、すむぶん日本は亂れてをりました。すなはち平家と源氏とが、しきり

巖谷小波著



第十回	佐藤忠信討死の巻	(一三三)
第十一回	辨慶苦忠の巻	(一三七)
第十二回	山中出産の巻	(一五二)
第十三回	泰衡愛心の巻	(一六六)
第十四回	辨慶往生の巻	(一七九)
附録	一の谷	(一九三)

差訂及口繪 金子茂二畫

に喧嘩をしてをりましたが、中にも源義朝は、左馬頭の位にゐまして、源氏方でも名高い大將でありましたのに、武運拙くも、平清盛のためにはうち敗けて、住みなれた京都を後に、東國さして逃げのびようとなりました途中、尾張國でたうとう討たれてしまひ、其子の悪源太義平も、ついで平家の俘虜となつて、六條河原で斬られてしまひました。

ところがその九番目の子に、まだその頃は生れたばかりの、名を牛若といふのがありました。その母親は常盤と云つて、容貌も氣質も優れた女でありましたが、やはり自分の胎にできた、今若、乙若と云ふ二人と一しよに、大和國に隠れてゐましたところ、その母の關屋と云ふものが、まだ京都に残つてゐましたのを、平家の方で引捕へて、常盤の所在を知らせればよし、さも

なければ命を取るぞと、酷たらしく拷問にかけると云ふことが、人の噂に聞えましたので、もとより孝心深い常盤は、ちつとしても居られなくなり、その母を助けたいばかりに、三人の子供を連れて、たうとう京都へ名乗つて出て、そのまゝ清盛の手についでしまひました。

この時清盛は、三人の子供に目をつけまして、こんな者を生かしておいで、今に大きくなつた上、きつと平家に祟をするだらう、はやく殺してしまはなければならぬと、恐ろしい考を持つてゐましたが、常盤がしきりに頼みますので、無理に酷たらしいこともできません、そんなら生涯坊主にして世間へ出さぬやうにしてしまへと、それ／＼寺へ遣つてしまひました。

この時牛若は、まだいたつて幼さかつたので、一人山科と云ふところへ里

にやられてゐましたが、その中おひく成人してききましたので、清盛の目に
つきましたら、また面倒なことにならうと、常盤はそれを心配して、鞍馬山
の別當をしてゐる、東光坊の阿闍梨を頼みまして、その弟子にしてもらふこ
とにしました。

東光坊の阿闍梨は、先の義朝の時分から、源氏とは懇意の坊さんでしたか
ら、快く承知しまして、そのまゝ牛若を引取りました。その時牛若はちよう
ど七歳、今ならやつと小學校へ上がる歳です。

さて牛若は、それから東光坊の阿闍梨のところへ、毎日お經と手習に精出
すことになりましたが、もとより生來利發な子でしたから、その記憶の好い
こと、只の一事を教つたばかりで、他の十事を悟るといふ有様、師匠の阿闍

梨も舌をまいて、實にこんな發明な子は、比叡山や三井寺の稚兒達の中にも
けつして比ぶ者はあるまい。この分でおひく修行を積んだら、今に立派な
名僧にならうと、しきりに頼もしく思つてゐました。

ところがそれから年を経まして、やがて十五になりました時、不圖した事
から氣が變りまして、今まではたゞ學問にばかり、一向餘念の無かつた牛若
が、急に本をすて、筆を抛げまして、代りに劍を握り、太刀を揮ふ、武張つ
た若者になつてしまひました。もつともこれには仔細があつたのです。

これより先、京の町に、正門坊といふ坊主がをりました。この男は、もと
義朝の乳母の子、鎌田次郎正清の子で、三郎正近といふ者でありましたが、
義朝は討たれ、父正清も亡ばされました後、わざと自分は坊主になりまして

折があつたら清盛を亡ぼし、天下をもとの源氏の有にしなければならぬと、私かに時節を覗つてゐたのです。

ところがある時人の噂に、その義朝の末の子の、牛若といふ若君が、鞍馬の寺に預けられてゐると云ふことを聞込みましたので、それこそ屈竟の御方ぢやと、心の中に喜びながら、やがて鞍馬へ尋ねて來ました。

そして、はじめて牛若を見ますに、容貌も氣高ければ、動作も凛々しく如何にも頼もしい若殿ぶりに、正門坊はいよゝゝ喜びまして、ある時そつとその側へ行つて、聲をひそませ、

「恐れながら若君には、何故こんな所にゐらつしやいまして、一生佛臭くお送りあそばしますか。考へても御覽あそばせ！ 貴君は清和天皇十代

の御末左馬頭義朝公の御子でござりませう。御父さまは清盛のために、無残な最後をお遂げあそばし、御一門の方々も、みな平家に亡ぼされて、今は見る影もござりません。何と口惜しいことではござりませんか。」

と、かう云つてまづ氣を引きました。牛若はぢつと正門坊を見ましたが、もとより伶俐な男ですから、うつかり返事は與へません。

「思ひもよらん事を云ふ。一たいお前は何者ぢや？」

と、問ひ返しましたが、その聲も流石に男々しうございました。正門坊は四邊を見まはし、

「その御油断の無いところが、一入頼もしく存じあげます。何をお隠し申

しませう。今こそかやうに頭を圓め、殊勝な姿をいたしてをりますが、私は鎌田の伴、三郎正近と申す者でございます。若君さへ御覺悟あそばせば直ぐにも私は還俗いたし、必ず御側へ馳せ參じて、再び源氏の御代にいたしますまでは、身を粉に碎いてもいとひはいたしません。』

と、さも思ひこんで云ひました。

牛若はちつと考へこんでゐましたが、この時はもう十五歳、常から世間の評判に、平家の我儘のことも聞いて、心に憤つてゐましたところでしたから、かうして油をさゝれては、なんで薪の燃えずにゐませう。こゝにたちまち心機を轉じまして、

『オ、正近、よく云うてくれた。この牛若も、今こそまつたく目が覺め



たぞ。それでは今日限り修行はやめて、源氏旗揚の用意にかゝらう。」

と、こゝでこの正門坊とも、後々の事を打ち合はせまして、その場は一まづ別れましたが、さてそれからと云ふものは、すつかり今までと様子がかはりまして、經文のことなど目にもかけませす。今に天晴れ武將になつて、戦の懸りをするのには、第一武藝が大切であると、毎夜のやうに坊をぬけ出しまして、裏山づたひに貴船明神へ參詣して、

「南無大慈の明神、八幡大菩薩！ わが源氏を守らせたまへ。この心願成就いたさば、玉の寶殿を造りまゐらせ、千町の御領を寄進いたしませう。」と、一心に祈念をこめて、その歸りには僧正ヶ谷の、杉の立木の生ひ茂つたところへ來まして、中での大木を清盛と見立て、まはりの雜木を平家の一族

にかたどり、

『おのれ憎い平家共、今にこのとほりにしてくれろぞ。』

と、太刀ぬきはなして切りたて薙ぎたて、獨りで劍術の稽古を始めました。

するとまたこの僧正ヶ谷に、年経て棲む大天狗が、この様子を見て取りまして、

『これは頼もしい小伴ぢや、取りたてゝ物にしてくれよう。』

と、自分の小天狗を相手に出して、しきりに牛若と闘はせますのに、初めの程は牛若の方が、打ち惱まされることもありました。それが、ほんの暫時の間で、しまひには小天狗どもが、一度に五六羽づゝ飛びかゝりまして、みな追拂はれ、打ち据ゑられて、とても相手にはなれないやうになりました。

この體に大天狗も大いに満足しまして、やがて牛若に秘傳の巻物を授け、さらに勉強させるやうにしましたから、おかげで牛若は、別に師匠も先生も取らずに、はや武藝の一と通りは、獨りでみんな卒業してしまひました。

ところがこの事が、東光坊にも知れましたので、それは以ての外のことだ。

この上は一日もはやく、髪を剃つて坊主にして、嚴重に修行させなければならぬと、弟子達にそのことを云ひつけましたが、どうして牛若がそれを聞きませう。剃刀でも持つて寄らうとすれば、刀の柄に手をかけて、寄つたら眞二つにしてくれるぞと、恐ろしい見脈を見せますので、誰もこはがつて寄りつけません。

仕方が無しに東光坊は、あらためてこの牛若を、覺日坊の方へ入れてしま

ひ、名も遮那王と呼ばせるやうにしました。

かうなりますと牛若も、覺日坊の律師のところ、嚴重に監督されますので、思ふやうに貴船へも参れなくなりましたから、その後は只多聞天にばかり、武運長久を祈ることにしてゐました。

その中に年もあけて、明くれば十六の時でございます。ある日牛若の遮那王は、多聞天の御堂へ出て、例のとほり祈念をこめてゐますと、そこへ大勢の供をつれた、立派な風采の参詣人が來ました。

遮那王は別に氣にもとめませす、祈願をすまして立たうとしますと、この男はその後からつけて來まして、

『モシ、卒爾ながら貴君様は、牛若様ではございませんか。』

と云ひます。

『いかに私牛若、今は遮那王と申すものぢやが、お前方に用はないはずぢや。』

と、管無く行き過ぎようとするのを、急いで又追ひつきまして、

『私こそは京の三條にをりまする、吉次信高と申しまして、毎年奥州へ下りまする、金賣の商人でございます。かねてから貴君様に、一度お目にかかりまして、申上げたい事もございまして、お尋ね申してをりましたところ。日頃信心の甲斐ありまして、今日御目にかゝりましたのは、何と申す幸福でございませう』

と、いかにも殊勝に、また親切らしい言葉です、殊にその中に、奥州と云ふ

ことが聞えましたから、奥州には源氏に縁のある者があると、かねて正門坊にも聞いてみましたので、遮那王も聞きすてならず、

『それではお前は奥州の事をよく知つてゐるだらう。少し話して聞かせてくれ！』

と、此方からも乗地になりました。

そこで吉次は、むかし源氏の大將八幡太郎義家が、奥州で長い間戦をしていろ／＼な功勞をしたことから、その時一しよに働いた者の後胤に、藤原秀衡と云ふ者が、今は立派な大將になつて、家來も大勢持つてゐると云ふことを、委しく話して聞かせました。

牛若はこれ聞いて、

『これはよいことを聞かせてくれた。それでは一つ私も行つて、その秀衡と云ふ人に會つて、源氏の旗揚の相談をしよう。』

と、大そう勇みたちました。

吉次も、これを見て大きに喜び、

『流石は左馬頭様の御子息、ようこそお思立ち下さいました。左様ならば御安心あそばせ、この吉次がお供して、きつと奥州へお連れ申ませう。』
と、こゝでいよ／＼牛若は、この吉次を案内にたて、はる／＼奥州へ下ることになりました。

第二回 奥州下りの巻

さて、牛若の遮那王は、金賣の吉次宗高と云ふ、おもひがけない味方をえまして、喜ぶこと一方ならず、さつそくこの男を案内にして、奥州へ下ることになりましたが、もとより自分は、鞍馬の東光坊に、まだ修行の身ですから、どうも公然出ることにはできません。

そこで、吉次とうちはあはせて、そつと東光坊を脱け出して、一晩は例の正門坊のところに泊まり、翌日この坊さんにおくられて、京の東の町はづれ、粟田口の十禪寺の前で、吉次の來るのを待ちあはせ、それから一しよに出か

けました。

もとより吉次は金満家のことですから、馬二十四匹に荷物を積ませ、そのほか供を大勢連れてゐますから、なか／＼大業な行列になります。遮那王は、その中に紛れこんで、首尾よく都を脱け出し、山科から大津へと、江州路へかゝりまして、やがて鏡の宿につきますと、その夜は長者の家に泊まることになりました。

ところが、丁度その晩のことです、思ひもよらない騒動がおこりました。それは由利の太郎、藤澤入道といふ、その頃名代の野武士どもが、子分を大勢連れまして、吉次の荷物や金を取りに、こゝへ亂入して來たのです。

由利の太郎は、三尺五寸の大太刀を引きぬき、藤澤入道は大薙刀をおつ取

り、子分の者に松火をふらせて、長者の家へと押しかけて來ますと、遮那王はこの物音を聞きつけ、急いで床からはねおきて、

『こりや面白いことになつたぞ。かねて鞍馬の僧正ヶ谷で、鍛えにきたえたこの腕を、試すにちやうど好い時が來た。』

と、用意の小太刀の鯉口をくつろげ、小腕に抱ひこみながら、わざと頭からは衣服をかぶつて、屏風の陰にかくれてゐました。

ところへ、由利の太郎は踏みこんで來ましたが、遮那王の體が小さいのでつひ氣がつかずに行かうとしますから、やり過ごして後から、

『曲者まで！』

と、聲をかけました。

驚いてふりむきますと、まるで女のやうな綺麗な少年が、そこにスツクト立つてをります。

『生意氣な小忤め！』

と、威かしに斬つてかゝりましたが、大きな男が大きな太刀を、家のなかで振りまはしたので、鴨居に切尖がぶつかつて、思ふやうに働けません。その間に遮那王は、すぐ手元へ飛びこんで行つて、二三度斬りむすんだとおもふと、左の腕を袖ごと斬り落とし、返へす太刀に敵の首を、見事にうち落してしまひました。

これを見て藤澤入道が、
『おのれ小癩な！』

と、云ひながら、大薙刀で拂つて來ますと、ヒラリとその上を飛びこして、はやくもその柄を切りおとし、こは残念と云ひながら、急いで太刀に手をかけたところを、抜かしもあへず斬りこんで、頭から兜をとほして、見事梨割にしてしまひました。

かうして、親分が二人とも、もろく討たれてしまつたものですから、ほかの子分の木葉武者は、まるで嵐に吹かれたやうに、皆チリ／＼に逃げてしまひ、間もなく騒ぎも鎮まつて、吉次をはじめ金も荷物も、みな無事に助かつてしまひました。

このことがあつてからは、流石に義朝公の御子息と、吉次はいよ／＼感心して、なほも大切に供をして行きました。が、やがて熱田に着いた時、熱田の

宮の大宮司のところで、いよ／＼遮那王に元服させることにしました。この宮司は義朝には、縁ついきにあたりますので、それでわざとその人を頼んで烏帽子親になつて貰ひましたが、名は遮那王が自分でつけて、それからは左馬の九郎、源義經と名乗ることになりました。その時年は十六だつたのです。

さて、東海道をだん／＼下だつて、伊豆の三島へ來た時は、義經みづから三島明神に參詣して、

『南無御堂大明神、願はくばこの義經を、三十萬騎の大將となしたまへ。

さもない中はこの山を、再び西へは越させたまふな！』
と、熱心にお祈をして、それから相模、武藏を過ぎて、下野の國へとさしか

かりました。この時、不圖思ひ出しますと、義經がまだ九歳の年、鞍馬の東光坊にゐた時分、陵の兵衛と云ふ男が来て、牛若丸の様子を見、

『坊ちゃん、今に大きくなつたら、きつと偉い大將になりますよ。それについて若し御用があつたら、どうぞ私のところへ御出で下ださい。お待ち申してをりますよ。』

と、いつたことがありましたが、その兵衛が、丁度この下野の、下道祖と云ふところに居ると云ふことですから、よし、あの男にも會つて行かうと、途中でわざと吉次に別れ、獨りで兵衛の家へ来ました。

見ると、思つたより立派な構へで、家來も大勢あるやうでしたが、何うしたものだか義經の、約束どほりたづねて來たのを、あまり喜びもしないばかりか、

りか、こんな者にかゝりあつたら、どんな迷惑がかゝるも知れないと、かへつて邪魔にする様子が見えましたから、義經も癪にさはり、たつた一日厄介になつたばかりで、その夜中に脱け出しましたが、その時、行きがけの駄賃に、兵衛の邸に火をつけて、すつかり焼拂つてしまひました。ずるぶん悪戯なことをしたものです。

それから、急いで行きます中に、今度は上野の板鼻と云ふところへ來ました。ところが生憎日が暮れましたので、どこか好い泊まる所はあるまいかと思ふと、彼方に一と構の邸が見えました。竹の垣に、檣の板戸、大きな池が掘つてあつて、そこに鳥なんぞが、浮いてゐますので、つひ見惚れながら、庭へ入りこみ、縁側から聲をかけて、

『御免なさい！、私は旅のものです、同伴にはぐれて、困つてゐるので、どうぞ一晩泊めて下さい！』
と、頼みました。

すると、奥から女が一人出て來ましたが、見るとこの邊には珍らしい、上品な風流をした少年が、一人で立つてゐますので、女は叮嚀に上にあげました、

『お宿をするのはお安い御用でございますが、實はこの家の主とまをす者が、心の荒々しい者でございますから、萬一失禮をいたすといけません。只今は幸ひ留守でございますが、歸りましても見つかりませんやう、どうぞ隠れてお休みを願ひます。』

と、奥の一間へ案内し、

『ここをどうぞお閉め切りあそばし、燈火も消してお置きを願ひます。』
と、親切に云ひおいて行きました。

義経は心の中に、

『さては、山賊の棲家であつたか。何にしても恐いことはない。今に主が歸つて來たら、あべこべに此方から驚かしてやるぞ。』

と、まづ室に入りましたが、太刀をすつと側に引きつけ、燈火はわざと消さずにおき、障子も皆明けはなして、何時でも來いと待ちかまへてゐました。その中に夜になりますと、にはかに大勢の足音がして、主が歸つて來たやうでしたが、そつと此方から覗いて見ると、年頃はまだ二十四五ですが、骨

柄のいかにも逞ましい男が、身を小具足でかため、手に槍をつきながら、ま
つ先に立つて來ますと、ついでに武骨な家來どもが四五人、鉞をかゝへる者
や、薙刀をかいこむ者や、また大太刀を腰にした者が、その後からついて來
ます。

さてこそいよく曲者だなど、義経は油断なく構へてをりましたが、その
中に主の男は、さつきの女を呼び出して、何か聞いてゐたと思ふと、やがて
入つて來ましたが、思ひのほか叮嚀に、敷居のそとから會釋して、

『これはお珍しい御客人、ようこそお出で下だされました。お年の若いの
に遠い旅路で、さぞお疲でございませう。何もございせんが、一口めし
上つて、御ゆるりお休み遊ばしませ！ 不束ながら私どもが、今夜はみな

寝ずに此方で宿直いたしますから、けつして御心配にはおよびませぬ。』
と、さも親切に云ひながら、やがて御膳を運ばせて、いろく御馳走をして
くれました。

義経は感心して、その夜は無事に明かしましたが、さて次の朝立たうとし
ますと、主はまた止めまして、

『昨晩からの御様子を拜見いたしますのに、どうもたゞのお方とは思はれ
ません。失禮ながら私も、仔細あつてこの邊に、世をしのぶ者でございま
す。品によつては、御力にもなりませうから、どうぞ御名乗りくださりま
せんか！』
と、云ひます。

義經も考へましたが、此方でも昨夜から、主を只者とは思つてゐませんか、今はなまじに隠すより、名乗つてしまふほうがよからと、覺悟をきめて主に向ひ、

『今は何をつゝまう。私は、先の左馬頭の末の子、九郎義經と云ふ者だが、これから奥州の秀衡のところへ、はるく會ひに行くところだ。』

と、すつかり明かして聞かせました。

すると主は、今さらのやうに顔を見つめて、
『さては、さう云ふお方でございましたか。不思議な御縁で御宿をいたし親しくお目にかゝりますとは、なんとといふ幸福でございました。實は私は先の殿様に、一方ならぬお世話になりました、伊勢の義連と申すものの忝

三郎義盛と申す者にござります。かうしてお目にかゝりますのも、八幡大菩薩の御利益でござりませう。この上は、今日からあらためて御家來にあそばし、やがて御旗揚のござります節は、是非一方のお役を勤めたくござります。』

と、さも嬉しさうに名乗りました。

それを聞くと義經も、前の陵の兵衛では、すつかり的がはづれましたが、こゝでは伊勢の三郎と云ふ、意外な味方を得ましたので、喜ぶこと一方ならず、やがてこの三郎に連れられて、再び道を急ぎましたら、程なく吉次に追ひつきまされたので、そこで一とまづ三郎に別れ、それからまた吉次と一しよに、いよく奥州へと乗りこみました。

第三回 鬼一法眼と湛海坊

さて義經は、伊勢の三郎にわかれましてからは、また吉次に案内されて、道々、鹽釜の神社に参詣したり、松島の景物を見物したりして、やがて陸前の平泉へ来ました。そこは藤原の秀衡が、立派に邸を構へて居るところです。秀衡のはうでは、思ひがけない珍客が、はる／＼都からたづねて来たので、すから、喜ぶこと一方ならず、長男泰衡、次男基衡……これは泉の冠者と云ひます……などを呼んで、

『この間私あひだわたしは不思議な夢ゆめをみた。それは黄色きいろの綺麗きれいな鳩はとが、一羽この家

へ飛びこんで来たところだつたが、見ろ、左馬頭殿の御子息ごしそくが、わざ／＼たづねて来られた。なんと云ふめでたいことぢやらう。お前まへがたもその心もちで、けつして魚想いさなむねのないやうに、よくお接待もてなししてあげるのぢやぞ。』と、よく云ひつけまして、家内中かないちゆうがうち揃そろつて、義經を丁寧ていねいにもてなし、また吉次きちじには、

『ほんとに、よいお客をお伴れ申してくれました。』

と、その禮れいに父子おやこの者ものから、いろ／＼な土地の産物さんぶつを賜たまりました。さて義經は、かうして秀衡の世話せわになつて、この奥州おくしゆうに年としを明あかし、やがて十七の春はるをむかへましたが、まだ時節じせつが来こないと見みえて、せつかく秀衡ひでひらといふ味方みかたはできて、思おもふやうに旗揚はたあげをすることも出来でません。

そこでまた思ひなほして、これはもう一度都へ歸り、なほ十分修行をした上、さらに時節をうかがふがよいと、かう考へましたが、そのとほり話したところで、主はなかく承知はしまい。かへつて留められると面倒だからとたうとうある日義經は、ちよつと散歩に出るやうな風をして、誰にも知らさず邸を出て、そのまゝ又只一人、都をさして歸つて來ました。もつともその途中では、もう一度例の伊勢の三郎に會つて、いまに私が旗を揚げたと聞いたら、お前がたはかう云ふ風にしてくれと、よく打合はせをしておきました。

義經は、京都へ歸ると、わざと京都の山科に棲んで、世間の人に知れないやうに、平家の様子をさぐつてをりましたが、ちやうどこの頃、京都一條の

堀河に、鬼一法眼といふ學者が住んでゐました。この人は御祈禱の名人で、よく御所へも出て、御用を勤めるところから、かねて天子様の御祕藏になつてゐた、十六卷の虎の巻をお預かり申してをりました。この虎の巻といふ物は、戦をしようとするにも、また國を治めようとするにも、一ばん大切な秘訣が書いてある、世にもたつとい巻物なのです。

義經はこのことを聞くと、何でも一度この巻物を、見せてもらひたいものだと思ひましたが、鬼一法眼はまた頑固な爺さんで、その邸を嚴重にかためて、めつたに人にもあひませんから、取りつく鳥がありません。

けれども義經は、構はず押かけて行つて、少しばかり門のあいだところから、ずつと内へ入つて行きますと、ちやうど、そこに小侍がゐりましたか

ら、

「先生は御在宅か。」

と、聞きますと、小侍は怪訝な顔をして、

「先生は御在宅ですが、何誰が入らしつても、おあひにはなりません。無駄だからお歸りなさい。」

と、云ひます。が、義經は頭をふつて、

「いや、他の者なら知らぬこと、私ならあはんことはない。何でも奥へ行つて、取次いでくれ。」

と、云ひます。小侍は仕方がないので、鬼一法眼に取次ぎますと、鬼一も小首をかたげ、

「はて、それはどのやうな男か？」

「さやうにござります。年はまだ十七八でござりますが、人品の好い、氣の利いた若者でございます。」

「さうか。……それならばあつてやらう。」

と、わざと立派な具足をつけ、手に大薙刀をつきながら、表の縁側まであらはれて、

「私にあひたいと云ふのは何者ぢや。」

と、さも横柄に睨みつけました。

義經は少しも驚かず、ツカ／＼とその前へ出て、

「先生は、恐れ多くも天子様から、御秘藏の虎の巻を預かつてあらつしや

るさうですが、せつかくの虎の巻も、お藏の中へ祕まひこんだばかりで、誰にも讀まないと云ふことは、寶の持ち腐れも同じです、ですからそれを見せてもらひたいと思つて、わざ／＼お弟子入に参りました、長いことは申しません。たいの一日貸して下されば、すぐ讀んでお返し申します。』

と、云ひますと、鬼一は腹を立てまいことか、

『おのれが／＼、小童のぶんざいで、大それたことをぬかしをるな。全體かやうな横着者を、誰がゆるして邸へ入れた。』

と、四邊の者まで吐りつけました。

けれども義經は、こゝで喧嘩しては損ですから、わざと下手に出まして、『イヤ、だしぬけにうか／＼しましたのは、重々私が悪うございました。し

かし、それと云ふのもみな先生の御徳を御慕ひ申して、わざ／＼まゐつたのでございますから、御腹も立ちませうが、どうぞ御弟子に遊ばして下さい。虎の巻のことは又重ねて、御機嫌のよい時お願いひませう。』

と、あやまるやうに頼みましたので、

『そんならどうとも勝手にせい。しかし何年をつたところで、虎の巻はさておき、猫の巻も見られはせんぞ。』

と、云つて奥へ入つてしまひました。

が、義經はこの時から、弟子ともつかず、家來ともつかず、このまゝ鬼一の邸に住みこみ、その間に機會を見て、何でも虎の巻を見なければならぬと、切りに隙をねらつてをりました。

するとちやうどこの邸に、幸壽の前と云ふ女がをりましたが、かねて義經を知つてゐましたから、この女の手引で、やがて鬼一の娘とも、仲よく話し合ふやうになりました。

そこで、ある日この娘に、

『實は私は、お父様の大切にしていまして、あの巻物が見たいのですが、お父様にお願ひ申しても、どうしても見せて下さいません。貴女がもし親切があるなら、そつとあれを持ち出して、私に貸して下さいませんか。さうすれば大急ぎで読んで、すぐに又お返し申します。』

と、折り入つて頼みました。すると娘も、ちよつと當惑しましたが、何しろ好きな義經の頼みですから

断ることは出来ません。そこである晩、寶藏へ忍びこんで、その大切な虎の巻を盗み出し、そつと義經に渡しました。

義經は大よろこびで、それからは晝も夜も、この巻物と首引で、一所懸命に勉強しましたから、七月から十一月までの間に、中に書いてある大切なことは、残らず覚えこんでしまひました。

ところで、鬼一法眼の方では、何時かこのことを知りまして、

『これは飛んでもないことになつた。』
と、大さう驚きました。が、なまじ荒立てると、可愛い娘まで罪におとさなければなりません。

そこで又考へて、何でもこれは義經だけを、はやく亡い者にしなければな

らぬと、かねてから弟子の中でも、強の者と評判の、満海といふ坊主を呼んで、

『お前の手で、あの若者を、巧く何所かで殺してくれ。さうしたらその褒美に、あの巻物を覗かせてやらう。』

と、云ひますと、満海は二つ返辭で、

『それは何のわけもないこと、裏の畑の茄子を切るやうなものです。』と、安請合にうけあひました。

『ついでには、何所で何うしてやりませう。』

と云ひますと、鬼一は耳に口をよせ、

『それには邸の内では面倒ぢや、うまく外へおびき出して、そこではらし

てしまふが上策。』
と、すつかり喋し合はせておき、それから又なに喰はぬ顔で、わざと義經を呼びまして、

『イヤ、この間から來てゐるのに、いつも魚相にしてすまなかつた。ところで今日は折入つて、お前に頼みたいことがある。實はわしの弟子の中に、北白川の湛海と云ふ、よろしくない坊主がゐるが、生かしておかれぬわけがあるから、何卒お前退治してくれんか!』

と、云ひます。

義經は心の中に、はやく鬼一の計略を見て取りましたが、わざとそしらぬ體で、

『それは、なかくむづかしい御用ですが、私に出来ますればよろしうございませうが……。』

『イヤ、決して出来んことはない。ちやうど今夜あの湛海は、五條の天神へ参詣する筈ぢや。その途中を待ち伏せて、油断のところを斬つて伏せ、首を取つて歸つて来い！ 褒美はきつと取らせるぞ。』
と、云ひますから、

『それでは一つ試つて見ませう。』

と、義經は支度して、やがて五條の天神へと、湛海退治に出かけました。これはかうして天神へやれば、かねて湛海は心得てゐますから、あべこべにこの義經は、湛海にやられてしまふものと、鬼一は高を括つてゐたのです。

ところが此方の義經は、湛海はさておいて、藤澤入道、由利太郎などといふ、強盗どもさへ見事に退治した、腕に覚えがありますから、久しぶりで又殺生をするのか、不憫でもあるが仕方がない、此方の命には代へられぬぞと、例の太刀を用意して、宵から五條の天神へ来ました。

まづ神前にお参りしてから、さて境内を見まはしますと、大きな松の木が一本あります。これは屈竟な隠れ場所だと、義經は四邊を見まはし、この木の下に身を潜ませました。

で、ちつと待つてをりますと、やがて足音が聞えました。見ると北白川の湛海坊、大雉刀を杖について、まつ先に進んで来ますと、ついで家來と思へる者が、五六人も供について、さもげふくしく、乗りこんで来ました。

第四回 辨慶太刀取の巻

松の下には、義經が隠れてゐたので、白河の湛海、その前を通りこして、まづお宮の前へゆき、大きな手をバタ／＼とならして、そこで何やら拜んでをります。そこを後からやつつけければ、何もわけはないのですが、それでは卑怯になりますし、第一お宮を汚してしまひますから、義經はわざとひかへて、歸るところを待つことにしました。

「こちらの湛海は、まづお參詣をすまして、さて見まはしますのに、まだ義經の姿が見えませんが、彼奴のことだから、何所かに隠れてゐるかも

知らない。よし、それならば呼び出してやらうと、わざと大聲で、

「源氏の弱蟲どこにをる？」

と、云ひますと、

「こゝにゐるぞ。」

と、云ひながら太刀ひらめかして繰出したのは、たしかに目ざす義經です。そのいきほひの鋭さに、湛海も家來の者も、一時にバツト逃げ出しました。が、やがてまた引かへし、大薙刀をふりまはしながら、義經に斬つてかゝりました。

けれども、義經はことゝもせず、大入道や荒武者を、右に左に討ちなやまし、少しも側へ寄せつけません。

その中に湛海は、持った薙刀を打ちおとされ、アツと云つて飛びのく間にたうとう首まで落されてしまひましたから、家來の者どもは膽を潰して、まるで蜘蛛の子のやうに逃げてしまひました。

可哀さうに湛海は、餘計なことを鬼一にすゝめて、かへつて命を縮めてしまつたのです。

しかし義経は、もう大切な巻物を、みんな讀んでしまひましたから、この時かぎり鬼一の邸を出て、後はそろそろ家來をあつめて、旗揚の用意に餘念もありません。

すると、ちやうど好いあんばいに、間もなく強い家來ができました。それは他でもありません。五月の節句の人形を見ても、義経にはせひ附物の、武

藏坊辨慶でありました。

この辨慶といふ男は、熊野の別當辨昌といふ者の、惣領息子でありました。が、何しろ母胎の中に十八ヶ月もゐて、生れた時からもう齒が生えてをり、他の子の三歳位もあると云ふ大きな體をしてゐましたので、名も鬼若とつけられたくらゐでしたが、五六歳の時分から比叡山の西塔にあげられて、稚兒の仲間に入つてゐますのに、なか／＼大人しくしてはゐません。暇さへあれば仲間をあつめて、裏の山で相撲を取つたり、脛押しをしたり、頸引をしたり、亂暴な遊びばかりしますので、するぶん皆に持てあまされてゐました。その中に鬼若は、たうとう比叡山を出て、改めて播磨の書寫山に登り、そこのお寺に住みこみました。が、こゝでも亂暴ばかりして、果は御堂に火をつ

けて焼きはらひ、再び都へ歸つて來ましたが、不圖思ひたちまして、千人斬といふことをはじめました。これは千人の人を斬つて、その持つてゐる太刀を、千本取つてやることでした。

これはその時分、奥州の秀衡は、名馬千疋、鎧を千領、松浦の太夫は胡蝶を千腰、弓を千張と、かういふ風に、武器を千づゝ揃へるのが、大將分の自慢になつてゐましたから、そこで辨慶も、それならおれは太刀をあつめて、大いに人を驚かしてやらうと、かう思ひついたのでした。

それで毎晩町へ出て、目ぼしい太刀をさげてゐる者があると、喧嘩を吹つけてそれを取りあげ、中に抵抗する者があれば、かまはず命まで取つてしまふのですから、さア京中の評判になりました。

『何だかこの頃は京の町に、天狗のやうな大入道があらはれて、人の太刀をさらつて行く』

と、みな恐がつてをりました。

その中に辨慶は、およそ一年ばかりの間に、九百九十九本取つて、あと一本の太刀を取れば、それで千本になるといふことになりました。時はちやうど六月の、十七日のことでしたが、辨慶は相變らず支度をして、太刀取の仕事に出かけましたが、まだ少し時刻がはやいので、五條の天神へ參詣し、

『何卒今夜の御利生に、天晴れ良い太刀をおさづけ下さい！』

と、勝手なことを願ひまして、やがてまた町へ出ました。するとどこからか笛の音が、さも涼しく聞えて來ました。流石の荒法師も、

それにしばらく聞惚れてゐましたが、その中にだん／＼近くなりまして、ちつと前を見ましたら、彼方から笛を吹きながら来る者があります。をりから雲をもれて来る月影に、ちつとその笛の主を見ますと、白い小具足を着こんだ、小作りの若者でしたが、その腰に佩してゐる太刀が、月明にまぶしいほど光つて、見事な金作りの太刀ですから、辨慶はもう黙つてはをられません。やがて近くなつたところで、

『こりや待て！ その太刀を渡さん間は、こゝ一足も通さんぞ。』と、聲をかけました。

すると先方の若者は、別に驚くやうすもなく、靜に此方へねぢむきながら、『さては評判の太刀盗人か？ よく今夜も出て來たな。よし、欲しければ

取つて見ろ！』

と、言ひます。

そのやうすが、一癖ありさうなので、辨慶も油断せず、腰の太刀をギリりとぬいて、威し半分斬つてかゝりますと、はやくも體をかはしたまま、ちよつと姿が見えませんが。

『オヤ變だぞ。』と叫びながら、よく四邊を見まはしますと、いつの間にか後にをります。

『おのれ』と忍びながら、また斬りかけると、ヒラリとまたどこへか飛んで、太刀は空をうつたばかりでした。で、又横を見かへると、彼方の土塀の陰にゐますから、今度こそはと追つ

めて、眞向から斬おろすと、はやくもまた體をかはされ、そのはづみに太刀の尖を、土塀へズブリと斬りこみましたから、急いでそれを抜かうとする間に、若者は横合から、ボンと辨慶の胸を蹴あげ、アツと云つて太刀をはなす間に、その太刀を取りあげて、自分は九尺もある土塀の上へ、ヒヨイと飛び乗つてしまひました。その働きのはやいこと、まるで水をつたふ山猿か、雨をぬふ燕のやうですから、さしもの辨慶もあつけに取られ、たゞボンヤリ立ちすくむばかりです。

すると若者は、土塀の上から聲をかけて、

『どうだ入道！ これでも太刀が欲しいか。欲しければ、ソレよい太刀をやるぞ。』

と、言ひなが、今取あげた太刀を、足にかけて踏み歪め、ガラリと投げてやりました。

辨慶はさまり悪さうに、その太刀を拾ひあげましたが、何しろこんな小さな相手に、さんく馬鹿にされましたので、悔しくてたまりませんから、

『よし、今夜はこんな仕損つても、明日は出直してあの太刀を、きつと取らずにおくものか。』

と、この晩だけは残念ながら、このまゝ引取つて歸りましたが、次の晩又も現はれ、今度は清水の観音堂へ行つて、

『今夜こそ、何卒勝たせたまへ！』

と、まづ祈願をこめまして、それから五條坂の方へ出ました。

するとまた、昨夜のとほり、好い笛の音が聞えてきました。辨慶は昨夜に懲りて、今夜はいつもの太刀のかはりに、大薙刀を用意して來ましたが、それを後に隠しながら、そつと前の方を見ますと、たしかに昨夜の若者が來る様子です。

辨慶は待ちかまへ、やがて近くよつたところで、

『昨夜の太刀を貰ひに來たぞ。』

と、薙刀をひらめかしてあらはれました。

と、若者は立ちどまつて、

『ホ、相變らず出をつたな。もとより太刀をやらんとは言はん。欲しければ取つて見ろ！』

『オ、取らいでか。』

辨慶は大薙刀で、用捨もなく眞向から斬りおろしましたら、若者は小太刀をぬいて、さもかるくとそれをうけとめ、二三べん打ち合ひますのに、そのまた手並のあざやかなのには、辨慶も内々氣味悪くなるくらゐでした。

その中に若者は、好い加減にあしらつたまゝ、スツと清水の御堂の方へ行きますから、辨慶は後から追かけましたが、體は小さくても足は速く、いつか見失つてしまひました。

残念には思ひましたが、ことによつたら御堂の中へ、紛れこんで居るに相違ないと、ついでに入つてゆきますと、ちやうど今夜は參籠の晩で、大勢の參詣人は、御堂に一ぱいつめてゐましたが、その中から、今しも高らかに聞

えて来る、御經の聲を聞きますと、昨夜から聞覚えのある、あの若者の聲に
ちがひありません。

辨慶はもとより坊主ですから、この御經はよく解りますが、それにしても
あの若者が、どうしてあんなことが出来るのかと、不思議に思ひながらも、
人をかきわけて押進み、やがてその側へ行つて、自分も負けぬ氣になつて、
同じお經をよみあげました。

その中にお經がすむと、若者は尻目に見ながら、

「入道、また来たか。よくよく太刀が欲しいと見えるな。」

「欲しくてたまらん。何卒くれ！」

「それでは尋常に勝負して、勝つたらいかにも太刀をやらう。負けたらお



れの家來けらいになれ。』

『よろしい。そのとほり承知しょうちした。』

『ではこゝは人中ひとなかだ、廣ひろいところへ出てやらう。』

と、若者わかものは辨慶べんけいをつれて、しづかに御堂おだうを出でて來きました。

この若者わかものは云いふまでもなく、牛若丸うしわかまるの義經よしつねでしたが、まだ辨慶べんけいはそのこと
は、少すこしも知しらずにゐたのでした。

第五回 頼朝義經對面の卷

さて義經と辨慶とは、いよく仕度をして清水の御堂を出ました。居あはせた人々は、みな面白がつて見物に出ましたが、中にはあまり急いで、欄干からのめり落ちた者もありました。

こちらの二人は、御堂の側の平地へ出ますと、さア来いと身構へして、これから太刀と薙刀と、さかんに打ちあひ切結びましたが、見ると一人は雲を突くやうな大坊主、一人は女のやうな美少年ですから、まるで大鷲にねらはれた鶯同様、たちまち手込めに合つてしまひさうです。ところが義經は、も

とよりたゞの若者ではありません。前へ躍りこみ、後へ飛び越え、右にはらひ、左に開いて、さんく相手に惱ました揚句、もう好い時分と思ひましたか、ヤツと云ふと稻妻のごとく、辨慶の左の脇のところを、鋭く一太刀切りつけました。

これに驚ろいて辨慶は、少し狼狽へた所をつけこみ、今度は太刀の峰でもつて、背をさんくに叩きつけ、弱つて前へのめるところを、すぐ馬乗りになつて組み伏せますと、見物は一度に聲をあげて、ドツと褒めたその聲に、清水の音羽の瀧も、しばらく聞えないくらゐでした。

義經は、静かに辨慶にむかひ、

『どうだ、これでもまだ抵抗するか？』

辨慶は、せつなささうに、

『いやもう恐入りました。』

『それならば降参か？』

『いかにも御家來になりませう。』

『よし、それなら従いて來い。』

と、云ひながら引き起しますと、辨慶はあらためて辭儀をして、そこでいよいよ大坊主の辨慶は、義經の家來になつてしまひましたが、この時初めて辨慶は、義經の名を聞かされまして、さてはさう云ふえらい方であつたか、それならなまじ金の太刀を取るより、又とない好い主人ができて、こんな嬉しいことはない、かへつて大いに喜びました。

この義經と辨慶とが、主従の約束をしたのは、普通は五條の橋だと云ふことになつてゐますが、義經記と云ふ古い本には、かういふ風に書いてあるのです。

何にしても辨慶は、こゝで好い主人を得ましたが、また義經に取つても、ほんとに好い家來ができたものです。

さて義經は、しばらく京都にをりましたが、その中に平家の方でも、義經を邪魔にするやうになりました。そこでまた支度をして、もう一度奥州へ下ることになりました。これは例の秀衡のところへ行つて、旗揚の相談をしよとしたのですが、その途中、また例の伊勢の三郎を誘つて、これも一しよに連れて行きました。

すると、ちやうどこの時分、一番の兄さんの頼朝は、伊豆の國に流されて
 ゐましたが、そこでも内々味方を集めて、まづ源氏の旗揚をしました。とこ
 ろが初めは運悪く負けて、土肥の杉山といふところで、あぶなく俘虜になら
 うとしたのを、大木の洞穴に隠れて、やうやくのことで敵の目を免がれ、そ
 れから船で安房の國へ渡つて、しばらく時節を待つてをりました。
 その中に和田の小太郎義盛、安達藤九郎盛長などといふ、強い大將も味方
 について来て、だんぐ軍勢が殖ゑましたから、また上總から、上野、武藏
 とまはつて、いよく味方を大勢あつめ、鎌倉に本陣を構へて、ふたたび平
 家を征めることになりました。

この事が奥州にも聞えましたから、義経はなんで黙つてゐられませう。さ

つそく秀衡に會ひまして、

『お前も聞いてゐるであらうが、兄上の頼朝殿は、關東八ヶ國を切り從へ、
 いよく大軍を催して、平家征伐に上られるさうだから、私もこれから駆
 けつけて、一方の大將を引請けようと思ふ。』

と、云ひますと、秀衡も大きに賛成し、

『いよく時節が來ました。兵隊はいくらでもお貸し申しますから、急い
 でお兄様のところへお出で遊ばせ！』

と、取りあへず泰衡に云ひつけ、有合せの三百餘騎を出して、義経の手に
 つけさせました。

義経は喜んで、これからすぐに出陣となりましたが、その時側にゐた郎黨

には、例の西塔の武藏坊辨慶、伊勢の三郎義盛をはじめ、園城寺から来た常陸坊海尊、乳母の子佐藤三郎次信、同じく四郎忠信の兄弟、いづれも頼もし剛の者ばかりでした。

そこで義經は、馬を急がせて進みましたが、何しろ奥州から、頼朝のゐる鎌倉までは大分ありますから、なか／＼思ふやうに捗どりません。その中には折角の兵隊も、途中で疲れてつかなくなり、初め三百餘騎あつたのが、武藏の國まで来た時分には、十五騎になつてしまひました。

それでも關はず、駈けにかけて、國府まで来て聞いてみますと、頼朝は一日通つて、今は相模の平塚あたりだと云ひます。急いで平塚まで来て見ますと、もう箱根を越えてしまつたところでした。さては又後れてしまつたか

と、義經は急ぎに急いで、やうやく箱根を越したと思ふと、先方はまた前へ進んで、駿河の浮島ヶ原邊にをります。

しかし、もう一ト息だと、義經は馬を飛ばして、やうやくのことで浮島ヶ原に着き、そこに張つてある頼朝の陣の、ちようと三町ばかり手前のところへ、取りあへず陣を構へました。

この時頼朝は、はやくもそれを見つけましたが、

『彼所に見えるは、何者の陣ぢや？ 旗の白いところを見ると、源氏方に相違ないが、今までに見覚えのない武者どもぢや。誰か行つて見とゞけて来い。』

と、云ひます。

側に居あはせられた堀の彌太郎が、心得ましたと使者に立つて、やがて義經の陣へ來ますと、

「鎌倉殿の仰せでござる。こゝに白旗を立てられたは、何所の何方かお名乗りなされ！」

と、大聲に尋ねました。

すると、やがて幕の中から、赤地錦の直垂に、紫裾濃の鎧を着し、白星の兜をかぶつた、二十四五の立派な若大將が黒馬に乗つてあらはれまして、

「これはようこそお尋ね下された。鎌倉殿もお忘れはない筈、これは幼名を牛若と申し、後に義經と名乗りました、弟の者でござる、この間から奥州に隠れて、時節を待つてをりましたが、今度兄上の御旗揚と承はり、

取る物も取りあへず、急いでお味方にまゐつたのでござる。何卒この事を

お取り次ぎください！」

と、聲もさわやかに名乗りました。

堀の彌太郎は、これを聞くと、

「さてはかねて噂に承りました、御弟御でゐらつしやいましたか。それ

では何で御遠慮におよびませう。さア何卒お出で下さいまし！」

と、すぐに義經を連れまして、急いで頼朝に取りつぎました。

するとまた頼朝も、幼い時に別れたきり、音信もろくに聞かなかつた牛若が、もうそんなに立派になつて、しかも加勢になりに来てくれたかと、まことに夢かと思ふばかり、急いで前へ通させました。

頼朝は總大將ですから、左右に大勢の大小名を従へて、さも嚴かに構へてをります。

義經はまた、この時佐藤兄弟と、伊勢の三郎だけ連れて出ましたが、いよいよ頼朝の前となると、兜を脱いで小姓に持たせ、まづ幕の口のところで、ていねいに一禮しました。

すると、頼朝は待ちかねて、

「オ、弟か！ よく来てくれた。さアこれへ〜！」

と、自分で迎へて敷皮の上になほらせ、

「イヤ、久しく會はなかつたが、立派に成人してくれたなア。」
と、後は涙に言葉も出ません。

義經はハツと手をつかへて、はじめて頼朝の顔を見ようとしますが、これも嬉し涙に眼が曇つて、すぐには挨拶も出来ないのです。

これは元よりさうありさうなことですから、側にゐあはせた大將達も、たがひに顔を見合はせて、貰ひ涙にくれました。

しばらくして頼朝は、やうやく涙を拂ひ、

「イヤ何から話さうやら、お父様にお別れ申して後は、兄と云ひ弟と云ひ、皆ちりぐに引きわけられて、生死のほども知らなんだが、それでもお前は私のことを、よく心に掛けてゐて、この大事に遠方から、わざわざ駆けつけてくれたとは、なんと云ふ嬉しいことぢやらう。私は實にお前一人で、千萬人の味方を得た心地ぢや、何を隠さう、今度の旗揚げは、お父様の弔

合戦、子として爲さねばならぬことぢやが、もとより味方と頼む人々も、昨日までは皆平家の者、親身と云うては一人もない。それ故今度の征伐も、他手を頼むことも出来ぬから、自分でかうして出るは出たが、またこの留守が何うあらうかと、それも案じられてならなかつた。ところへちやうとお前が来てくれたは、何と云ふ好都合だらう。これは正しくお父様のお引合はせに相違ない。あゝ、有難いことではないか。』

と、云ひますと、
 『仰せのとほり私どもは、幼い時から別れ、親兄弟も知りませんが、今かうしてお兄様の、御無事な顔にお目にかゝつたり、さう云ふお言葉をうけたまはりますと、私にはお父様にお會ひ申すやうな心地がいたしまし』

て、こんな嬉しいことはございません。たゞ此上は私を、せめて片腕とも思召しまして、お心置きなくお使い下さい！ 及ばすながら私も、再び源氏の家を興すまでは、身を粉にいたしても厭ひません。』

と、さも頼もしく答へました。
 こゝで兄弟の對面がすみますと、あらためて頼朝は、他の大將達に義經を紹介させ、

『さて、この弟が来てくれた上は、今日からこれを私の代りに、平家征伐の大將にするから、お前方はそのつもりで、今からこの者の指搦に従ひ、すむぶん功勳を樹て、くれ。私はまた鎌倉に歸つて、關東の守りを固め、一日もはやく凱旋するのを、楽しみにして待つてゐるぞよ。』

と、かう云ひわたしましたから、並みゐる大將も心得て、それより九郎義經を、源氏方の總大將として、いよく平家征伐に向ふことになりました。

第六回 宇治合戦の巻

さて源義經は、兄の頼朝にあひまして、平家征伐の大役を頼まれますと、これで日頃の望みがかなつたと、勇みたつこと一方ならず、これから頼朝にかはつて、自分が源氏の總大將になり、急いで京都へと征め上りました。するとちやうどこれより先、木曾の冠者義仲も、同じく源氏の旗揚をして、一步先に京都へ征めこみ、もう平家を追拂つてをりましたが、その癖これを攻め滅しませず、今度は自分が京都にぐわんばつてをりましたので、かへつて天子様の、御機嫌をそんじてゐました。

ですから義経は、また朝廷の御宣をうけて、この義仲を討ち亡ぼし、ついで、平家をおつばらひ、一の谷から不意に攻めかけて、須磨の陣を攻め落とし、それからまた屋島にわたつて、そこでさんぐくに敗つて、たうとう檀の浦で平家の仲間を、見事に攻め亡してしまひました。

その戦の間には、面白い話が澤山あります。

まづ義仲との合戦には、宇治川の先陣争ひといふ、名高い話がありました。すなはち義経は東海道を、京都へ征め上つて行きましたが、兄の範頼は、近江の勢多の橋から向つて行きますのに、義経は同じ川の下流の、山城の宇治橋から攻め込もうとしたのです。

ところが義仲の方でも、よくそれを知つてゐましたから、寄手のまだ來な

い間に、宇治橋の桁を落として、渡ることの出来ないやうにしてしまつたのです。

ところへ義経の大軍は、川の手前まで押よせて來ましたが、橋の上が渡れないといふと、何うしても川の中を渡らなければなりません。義経は仕方ありませんから、川の岸に高櫓を組ませ、その上に控へて見渡しながら、

『誰でもよいこの宇治川を、目事渡つて先陣をしたものは、さつそく鎌倉殿へ申上げて、見事な御褒美にあづからせるぞ。』

と、味方のものを激ました。

けれどもまた對岸には、敵の大軍が控へてゐて、一人でも川を渡りかけたら、すぐに射倒してしまふぞと、弓矢を構へて睨んでをります。更にこの宇

治川は、名高い流の速いところですから、うつかり入ることも出来ず、しばらく誰も飛び出しませんでした。

これを見ると畠山重忠は、齒痒く思つて進み出で、

『この川は昔から、近江の湖水の落として來るところで、今日に出来上つたものではない。初めから知れきつた話だ。それを今更水勢に怖ぢて、尻込するとは何と云ふことだ。誰も乗り切る者がなければ、この重忠が手本を見せてやる。』

と、すでに自分が乗り込もうとしますと、この時早く平等院の側の、小島ヶ崎と云ふところから、花々しく扮装した、若武者が二騎あらはれて、サツと水煙を立てたとおもふと、馬を高う嘶かせながら、はや川の中へと乗り込みま

した。

これぞ鎌倉でも評判の勇士、一人は梶原源太景季、一人は佐々木四郎高綱でした。この二人はかねてから、今度の戦に功名をしようといふので、出陣の間際に頼朝を強請つて、梶原は磨墨、佐々木は生暖と云ふ、秘藏の名馬を貰つて來たくらゐですから、今日の晴の合戦に、なんで猶豫をしてをりませう。先刻から十分支度をして、さてこそ此所から乗り込んだのでした。ところが初は梶原の方が、すつと先に進みました。佐々木は後から聲をかけて、

『オイ源太殿々々々、君の馬の腹帯がなんだか緩んでゐるやうだせ。鹿相があつては大變だぞ。』

と、注意しました。これを聞くと梶原も、なるほど腹帯が緩んでは、馬は思ふ様に働けませんので、

『さうか、それは難有う。』

と、云ひながら馬を控へ、鎧に足を踏み伸して、手に持つて居る弓を口にくわへながら、手ばやく腹帯を締めなほしました。その間に佐々木は追ひ越して、たうとう先陣の功名をしました。

それを見ると義經勢は、急に元氣がつかまりました。

『ソレ後れるな、つゞけ〜！』

と、皆川を渡りかかりましたから、敵の方でも一所懸命、雨のやうに矢を射かけて、追ひはらはうとしましたが、もう間にあひません。見る〜うちに

攻めたてられて、其所の陣にも居たゝまれず、たうとう逃げ出してしまひました。これが原因で義仲は、間も無く京都を追ひ立てられ、北國さして落ちて行く途中、近江の粟津と云ふところで、たうとう討死をしまつたのです。

その後で義經は、首尾よく京都へ乗り込みまして、今まで天子様を御苦しめ申してゐた義仲の代りに、あらためて御命をうけて、いよく平家を征めることになりました。

もつとも此時平家方は、もう清盛は死んでしまひ、兄の重盛も其前に歿つて、あまり偉くない宗盛の代になつてゐましたから、義仲に追拂はれて、攝津と播磨の境の、一の谷と云ふところに立て籠り、そこで英氣を養つて、も

う一度都へ征め上らうとしてゐたのです。

そこを義経は、義仲を亡ぼした勢で、さらに攻めかけて來ましたが、何しろこの一の谷と云ふところは、後に山、前に海を控へた、要害の堅固なところですから、容易には攻め落すことが出来ません。

で、義経はまづ手配をして、切りに近所の地理をしらべさせましたら、この一の谷の陣屋の後に、鴨越と云ふ險阻なところがあります。茲は敵も頼みにして居るところですから、若し其所から攻め落とせば、譯なく敵は破れると云ふことが解りました。

ところでその鴨越と云ふのは、丁度この名の通り、鴨のやうな小鳥でなければ、とても越えることの出来ないくらゐな、いかにも険しい懸崖で



すから、とても尋常では通ることが出来ません。

けれども義経は、もとより血氣な大將ですから、いまさらその場が險阻だと云つて、決して尻込などをしません。何でも其所から攻め落とせといふので、苦心してまづこの上まで登りつきました。

で、下を見おろしますと、平家の陣屋はその下に、手に取るやうに見えますが、それへは羽根の生へた者でなければ、とても飛んでは降りられさうもありませんので、流石にしばらく遅延ひました。

この時今度の此所の戦に、案内者として召しかへた、鷲尾三郎と云ふ者が、その側に居りましたから、義経はこれを見かへり、

『三郎！ 汝は此所を下りたことがあるか。』

と尋ねますと、三郎は進み出て、

『私も生れた時から、此邊の山を棲所のやうにして、するぶん方々駆けまはりました。が、まだこの谷は降りたことがございませぬ。何しろ御覽のどほりの險阻で、上七八段は屏風のやうな岩、下五六段は岩礫になつてをりますから、とても人間には通れませぬのでございませぬ。』

『それなら鹿は通るか？』

『なるほど鹿はをり／＼出てまゐります。』

『して、下には別に濠でもあるか。』

『どういたしまして、とても攻められる筈はございませぬから、そんな用心は出来てをりませぬ。』

これまで聞くと義經はうなづき、

『よろしい。鹿も四脚なら馬も四脚、鹿の通へるところを、馬の行かれぬ』

筈はあるまい。まづ試しにおろして見ろ！』

と、やがて引いて来た馬の中から、赤毛と白毛とを一匹づゝ出させて、その尻に鞭をくると、崖から下へと降りさせました。

ところが二匹は道もない崖を、するり／＼とすべりながら、下の谷へ降りてゆきますのに、赤い方は途中で躓いて、そのまゝ轉げ落ちましたが、白の方は怪我もせず、見事に下へ降りついて、さも自慢さうに嘶きました。

この體に義經は、扇をあげて大聲に、

『あれ見よ赤は倒れたが、白は見事に渡つたぞ。赤は平家、白は源氏——源』

氏にとつてはよい吉兆だ。もはや何も恐るゝことはないぞ。者共つゞけ！」
と、下知をすると、真先に自分が降りはじめました。

これに味方の士卒共は、等しく勇氣を倍して、

『ソレ、大將にをくれるな！』

と、何れも手綱を引きしめながら、馬を崖へと乗りおろしますのに、案ずるよりは産むが易く、思ふよりは樂々と、皆谷を降りることができました。

かうなるともう此方のものです。其勢で平家の陣を、不意に襲ひかゝりましたから、平家は慌てうろたへて、見る／＼中にさん／＼に破られ、たうとう此所の陣所も棄て、我先にと船に乗つて、はるか對岸の讃岐の國の、屋島へと逃げてゆきました。

第七回 屋島檀の浦の巻

さて平家は、一の谷の陣所を破られて、舟で瀬戸内を乗り越へ、たうとう屋島へ逃げ歸りました。義經はすかさずこれを追ひ驅ける事にしました。

その時攝津の大物の浦から、いよ／＼船を乗り出すといふとき、はからず梶原景時と、はげしい議論をはじめました。すなはち梶原はまづ進み出て、

『今度の船戦には、逆櫓をお用ひあそばすがよろしい。』
と、云ひました。義經は聞きとがめて、

『逆櫓とはなんだ？ 梶原！』

『御存じなくば申上げます。およそ櫓と申すものは、船を進めるものでございませうが、戦場の掛引には、また退くことも大切でございませう。よつて船の舳のところへ、別に櫓を逆につけて、敵の勢のするどい時は、これで船を逆にもどすのでございませう。』

と、梶原が得意になつて、講釋をはじめますと、皆まで聞かず義經は、『そんな物がなんの役にたつ？ どうせ戦に出た以上、誰だつて命掛だぞ。敵の勢がするどければ、なほ勇み立つて進まなければならん。それに初めから逃支度の、逆櫓なんぞは要らんことだ。馬鹿々々しい。』と、頭から取りあひませんから、梶原もムツとして、『なるほど御仰せ御道理ですが、進むを知つて退くを知らぬのは、猪武者』

と申しまして、匹夫の勇でございませう。』

と、云ひかけたからたまりません。常からこの梶原の、高慢ぶつた振舞が、癪にさはつてゐたところですから、義經はカツとなつて、

『黙れ梶原！ この義經を猪とは、なんだ無禮者めが。』

と、怒鳴りますと、梶原も負けてはゐません。

『軍の評定なればこそ、思ふ儘に申上げたに、なにが無禮でございませう。』と、顔色を變へて立ちかゝり、すでに喧嘩にならうとしました。三浦義澄、畠山重忠、土肥實平など、云ふ、大將達がなかへ入つて、やうやく兩方をなだめました。

けれども梶原は、この時から腹を立て、それきり義經の手をはなれ、絶

頼の方の軍に入つて、鎌倉へと先へ歸つてしまひました。

ところがこれが義經のためには、大變面白くないことになりました。後に梶原が頼朝に讒言し、その間を悪くさせたのも、全くこのためであつたのです。

けれども義經は少しも氣にかけず、そのまま屋島へ押し渡つて、こゝでも平家をさんぐに苦めました。

もつともこの戦の間に、又面白いことがいくらかもあるのです。

ある日平家方の陣から、一艘の小船が出ました。見るとその上には、戦の場所には不似合な、立派な官女が中央に立ち、艘に長い竿を立て、その上に日の丸の扇子をつけ、



『源氏方の弓取りに、見事これを射て落とす者があるか。』
と、からかふやうに出て來ました。

義經はもとより負けぬ氣の大將

『おのれ小癩なことをするな。誰でもあれあの的を、見事一ト矢に射て落とせ！』

と、味方の陣を見渡しました。

すると島山重忠が出て、

『これには丁度好い射手がをります。』

と、云いながら呼び出したのは、下野の住人那須太郎助宗の子で、與市宗高と云ふ若者でした。

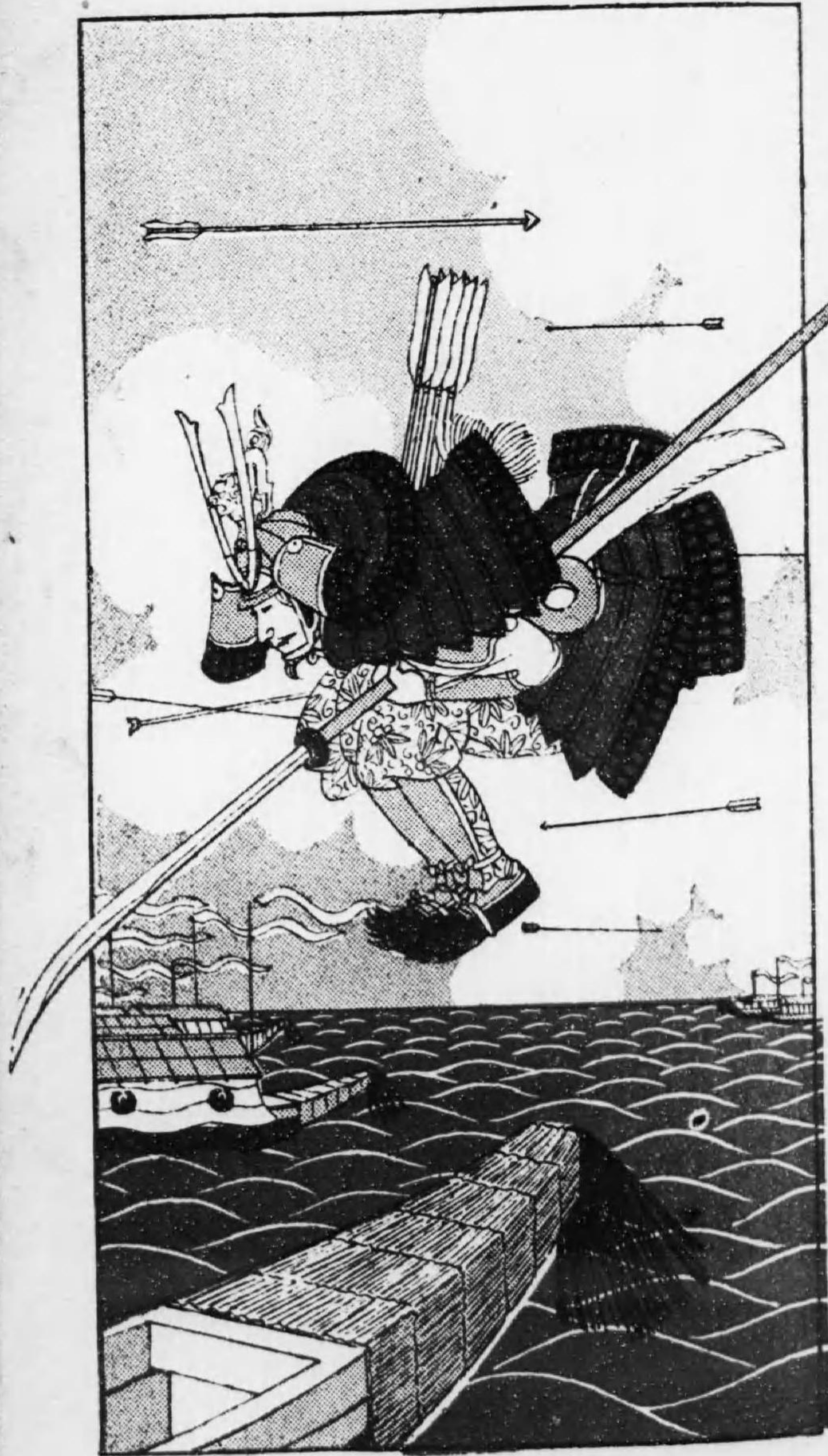
那須與市宗高は、この時まだ十七歳の若武者でしたが、名を指されたので
 勇み立ち、やがて馬を波打際に乗入れ、まづこの的を見渡しますのに、船
 が波に揺れますので、扇は始終動いてゐて、少しも一つ處にありません。
 けれども宗高は、飛ぶ鳥でさへ、射て落す名人、何でそれに驚きませう。
 まづ弓に矢を番がへ、しばらく狙つてゐましたが、
 『南無弓矢八幡！ この一ト矢を護らせたまへ。』
 と、口の中に念じながら、矢比をはかつて兵とはなりましたから、その矢は
 たちまち宙を飛んで、扇の要を見事に射抜き、扇は飛んで舞ひながら、やが
 て波へと落ち込みました。
 これを見ると義経はじめ、味方の者は雀躍して、

『出来した〜！』
 と、賞めました、敵もこれにつり込まれて、同じくヤンヤと囃しました。
 この時この船に乗つて居たのは、平家方に取り籠められて、此所までも落
 ちてお出でになつた、安徳天皇の御生母、建禮門院の御側の女官で、玉蟲の
 前と云ふ女でしたが、綺麗な日の丸の扇の、海に浮ぶさまを見て、
 時ならぬ花や紅葉をみつるかな
 芳野初瀬の麓ならねど
 と云ふ、歌を詠みました。ところが同じく平家方の、伊賀十郎兵衛と云ふ武
 士は、船の舳に立ちあがり、薙刀を振つて躍つたものですから、此奴もよい
 的だと云ふので、直ぐ與市に射倒されてしまひました。

これは屋島の扇的と云つて、今でも知らない者はない、那須の與市の功名話ですが、平家の方にも亦これに負けない、弓の達者な男がありました。それは能登守教経と云ふ、大そう強い大將でしたが、何でも義経を討ち取らうと云ふので、切りに矢を射かけますのに、その弓の力が強いので、それに狙はれたらたまりません、片端から皆將基倒になつて、源氏方の名ある武士も、大分やられてしまひました。

能登守は勝に乗つて、なほも激しく射立っています。果は大將の義経も、はその目に睨まれて、すでに危く見えしました。

すると、それを見て取つて、佐藤繼信は氣が氣であります。何でも義経に怪我をさせまいと、自分で矢表に走り出で、その矢を薙ぎ落さうとしまし



たが、武運拙く敵の矢に、見事首の骨を射ぬかれまして、馬から下へと落さ
れました。

この繼信と云ふ男は、同じく佐藤忠信と兄弟で、義經の乳母の子ですから、
義經には乳兄弟になるのです。それで忠義のためとは云ひながら、義經の身
代りになつて、名譽の戦死を遂げたのですから、義經は大そう感心して弟
忠信の擔ぎ込んで来た、繼信の死骸に向ひ、まだ息のある人に云ふやうに、
『コン繼信、よく死んでくれた。後は十分に弔つてやるから、心安く往生
してくれよ。』

と、涙ながらに云ひますと、繼信はさも嬉しさうに息を吹き返して、

『ア、難有うございます。』

と、一言云うてそのまゝ絶え入りしました。

こんな風でしたから、此の屋島の船戦は、源氏もずるぶん苦戦したのです。それで大將、義經も、この教經に追ひたてられて、船から船へと跳びうつる中に、持つてゐた弓を落して、波に取られてしまひさうになりました。

その時義經は、危い中から鞭をさしのべて、やうやくその弓を拾つて逃げましたが、後で側の家來達が、

『高が弓一張……捨てゝいらしつてもよろしうございませうに、あんな危いことを遊ばして、萬一のことがあつては大變でございませう。大將にも似合ひ遊ばしませんこと……』
と、申しましたら、義經は頭をふつて、

『いや〜、あの時弓をすてゝくれば、後で敵に拾はれて、彼是云はれる

が業腹ぢや。この義經は弓は惜まんが、名を惜むだから弓を拾ふた。』

と、云ひました。名將の心掛は又別なもので、かう云ふ急な場合にも、こんな餘裕のあると云ふのも、他の大將には出来ないこととせう。

ですから間も無く士氣を盛りかへし、たうとうこの屋島でも、平家の軍をさんぐに破りましたから、平家方は居たゝまれず、又船を西へと向けて、長門の檀の浦まで逃げました。

ところを義經は又も追ひ詰めて、此所でたうとうこの平家を、見事に亡ししてしまつたのです、可愛さうに大將も家來も、皆西海の藻屑になりましたが、それでも義經は、安徳天皇丈は御救ひ申して、都へお連れ申さうとしまし

たのに、平家方でどうしても放さず、二位の尼がお抱き申したまふ、一所に海へ沈んでしまつたのは、何ともお痛はしい次第でした。天皇はこの時漸く御二才、今にその御陵は、下の關の海岸にあるのであります。

第八回 堀川夜討の巻

さて義經は、せつかく平家征伐を仕了せて、見事な功勳をたて、得意になつて京都まで引あげ、天子様にも御褒めにあづかつて、檢非違使、五位の尉の位もいたゞきました。これで今度は、俘虜にした平家の大将、前の内大臣平宗盛(清盛の子)父子をつれて、鎌倉さして歸つて來ました。その心の中には、久しぶりで兄様にあつて、今までの功名談もして、大きに喜んで貰はうと思つたのです。

ところが、その少し手前の、腰越まで來ましたところで、どつこい通さぬ

と止められてしまひました。それには例の梶原が、頼朝に讒言して、

「義経様には野心がおります。その證據には、此の間一の谷の合戦で平重衡を生捕りました時、初め範頼様の手に渡りましたのを、義経様はおほいにお腹立で、無理に御自分の方へ分取りになりました。その上、今度平家を退治すれば、その功によつて關西一面は、この義経の天下になるなど、威張つてゐらつしやいました。もつとも鵜越などと云ふ、鳥獸も通ひかねるほどの、恐ろしい險阻のところを、小勢をもつて攻めくだつて、難なく平家の多勢を追拂ふなど、尋常一通の大將とも思はれません。それに屋島攻の時など、私がせつかく申上げて、逆櫓をお用ひにならなやうな、向ふ見ずのお方ですから、この後あの上圖にお乗りになつては、

何をなさらんとも限りません。實に恐しいお方でございます。』
 など、しきりに説きつけました。

かう云はれると、もとより頼朝もえらい男でしたが、根が疑深い質だけに、なるほどさうかと思ひました。それで、さう云ふ不埒な男には、會ふのも面白くないからといふので、腰越から先へ通さんことにしてしまひました。義経は悔しくてたまりません。これといふのもあの梶原奴が、よけいな讒言をしたからに相違ないと、これから自分で手紙を書いて、——私の今度の働きは、もとより天下のため、また源氏のためではありませんが、一には、せつかく兄上に頼まれたので、出来る限りの骨をつて、その志に酬いやうと思つたのに、かへつてかやうな不首尾をうけるとは、かへすぐも残念

にたへません。何卒私の眞情を酌んで、御心の解けるやうに願ひますと、懇ろに申入れました。

けれども、たうとう會ふことはできず、義經は残念ながらも、スゴク腰越から引かへして、ふた、び京都にもどりました。これは京都の御所に、まだ後白河法皇が、御自分で政を執つてゐらつしやるので、その御警護の役をつとめることになつたのです。

ところが、また頼朝には、それが氣になつてたまりません。もし義經が、梶原の云ふ通り、恐ろしい野心をもつてゐれば、すぐ法皇を自分の方に仰いで、つひには自分をも押しつけたいともかぎりませんから、まづ梶原と相談して、どうかして義經を、京都から追拂はうとしました。

と、ちやうど鎌倉の二階堂に、土佐坊昌俊と云ふ、坊さんがゐました。

これがなか／＼強い坊さんですから、これを義經の討手にやつて、隙を見て亡い者にさせることにしました。

土佐坊は心得て、屈竟の武士を五六十人だけ連れて、やがて京都へ上つて來ました。

この時義經は、堀川に邸をかまへて、始終京都を見張てをりましたが、鎌倉から、二階堂の土佐坊が、この頃上つて來てゐると聞いて、はやくもそれと悟りましたが、なににしても、鎌倉の者が、はる／＼京都へのぼつて來ながら、自分のところへ挨拶に來ないのは、怪しからんことだと云ふので、江田の源三といふ者を使ひやつて、わざと迎ひにやりました。

ところが、土佐坊は、

『せつかくのお迎ひではございますが、今日は少々風邪をひきまして、気分が悪うございますから、件を代理にさし出させうかと、存じてをりましたところでございます。』

など、胡麻化して出やうとしません。義經はこのことを聞いて、いよいよ腹を立て、をりをりますところへ、ちやうど來合はせたのは辨慶でした。

『オ、よいところへ辨慶か！ 貴様なら、あの坊主、すぐにも引上て、來

られるだらう。』

と、迎ひの役を云ひつけましたから、辨慶は心得て、すぐに身支度をし、わざと裸の馬にのつて、土佐坊の宿へとやつて來ましたが、もとより氣速の荒

法師ですから、案内も待たず、奥へ踏みこみますと、ちやうどその時土佐坊は、大勢の郎黨を集めて、なにか評定をしてゐるところでした。

辨慶は、一座を睨めまはしながら、土佐坊にむかひ、

『いかに土佐坊殿、なんの御用か知らぬけれども、この京都へ來たからには、すぐにも堀川へ出頭すべきに、今まで怠るばかりでなく、せつかくお迎ひの者がまゐつても、假病をつかつてまゐらんとは、無禮千萬ではござらんか。』

と、厳しく談じつけました。

土佐坊はうろたへて、なにか辯解をしかけますと、辨慶は頭をふつて、
『イヤ、云ふことがあるなら御前で云はつしやい。さア私が連れてつてあ

げやう。』

と、云ひながら、その手を取りました。

居並ぶ郎黨も驚いて、さては計略を氣取られたかと、青くなつてしまふ者もあり、中には、もう破れかぶれと、刀に手をかけた者もありますが、土佐坊も流石に考へまして

『イヤ、皆騒ぐことはない。御用が済んだら、すぐ歸へるから、しばらくここに待つてゐるがよい。』

と、家來の者をなだめまして、まづ辨慶にむかひ、

『それでは、お供いたしますから、馬の支度をさせますまで、しばらく待つていたゞきたい。』

と、云ひましたが、

『いゝや、それにはおよばん。馬ならば此方にある。これに乗つて行かつしやい。』

と、云ひながら土佐坊を、まるで小兒のやうに引つ抱へて、裸馬に一しよに乗せ、そのまゝ堀川へ連れて歸りました。

義経は待ちかねて、土佐坊を前へ呼びつけ、

『一體何しに京都へ來た！』

と、尋ねますと、

『實は頼朝公の御代拜で、これから熊野へ參るのでございます。さつそく御挨拶に伺ふところでございましたが、途中で少し風邪を引きまして……』

と、云ひかけるのを、みなまで聞かず。

『いゝや、さうではあるまい。おれを討取りに來たのぢやらう。遠方のところを御苦勞なことぢや。して、手勢は幾人ほどあるな？』
と、正鶴をさしますと、

『飛んでもないことをおつしやいます。それは定めし何者が、讒言をいたしたのでございませう。』

『熊野參詣にまゐるものが、あんなに武士が大勢要るか？』

『イヤ、途中に山賊などがをりまして、物騒だと申しますから、それで用心に連れましてございます。』

『など、申してもとほらんど。貴様の連れてゐる郎黨どもが、明日は大騒

動が起るなぞと、噂をいたしたと云ふではないか。』

『それも何かの間違でございませう。しかし、それほどお疑ひとあらば、致方がございませぬ。こゝで起請文を書きますでございませう。』

『オ、起請文を書くか、書いて見ろ！』

『畏まりましたでございます。』

と、たうとうこゝで土佐坊は、起請文を書くことになりました。これは討手にむかつたのではないと云ふことを、神様に誓つて證書を書くことですが、土佐坊もよく／＼苦しかつたので、義經ばかりか神様にまで、一しよに嘘を吐くやうになつたのです。

第九回 義經都落の巻

義經と、辨慶に捕まつては、さしもの土佐坊も、苦しまぎれに、起請文を書かされて、やつとそこを放されましたが、この上は破れかぶれ、なまじ時を過ぎては、かへつて事を仕損じやうと、その晩のうちに支度をして、この堀川の義經の邸を、急に夜討をすることにしました。

ところが、また義經のはうでは、起請文まで書かせたのですから、まさかに土佐坊も手は出せまいと、高をくくつて油断をして、辨慶をはじめ、龜井六郎、片岡八郎、伊勢三郎、駿河四郎などの、四天王の面々も、みなよその

宿へ行つてゐて、邸に残つてゐた家來といつては、たゞ御厩の喜三太といふ、馬丁の若者ばかりでした。

するとその夜半ごろ、にはかに物音が聞えまして、大勢の者が、押しよせて来るやうです。それを聞きつけると、この間から、義經の側についてゐた、静御前といふ女は、なにも知らずに寝てゐる義經を、しきりに呼び起しました。容易に目の覚める氣色がないので、手ばやく鎧櫃から鎧を出して、それを枕許へ投げ出しました。

と、義經は跳ねおきて、

『何ごとだ？ あわたいしい。』

『夜討がまゐつたのでございます。御油断あそばしますな！』

『ナニ夜討か、さてはやつぱり土佐めだな。よし、誰でもあれ、義經のところへ小癩なことをしにまゐるとは、飛んで火に入る夏の蟲ぢや。目に物を見せてくれるぞ。』

と、云ふうちに身支度をして、庭から表へ出て見ますと、喜三太はまたかひがひしく、四人張の強弓に、矢を番へては引きはなし、一しやう懸命に働いてをります。

このとき、土佐坊は、もう門のところまで寄せてゐましたが、中にはどんな要害があるか、それが少しもわかりませんから、容易に中へは踏みこまずにをります。

ところへ、もう辨慶は、この物音を聞きつけて、自分の宿から飛んで来ま

すと、ほかの龜井も、片岡も、伊勢も、駿河も駆けつきました、一しよになつて防ぎましたので、せつかく寄せて来た、土佐坊の軍勢も、この勇士たちに射すくめられたり、薙ぎ倒されたり、斬り伏せられたり、さんく々な目にあはされ、中にも土佐坊の子の土佐太郎などは、もう十九になつてゐましたが、途中で喜三太に生捕にされて、馬屋の柱にくくりつけられ、また従弟の五郎盛直は、辨慶にあつて馬から落され、其まゝしぼり上げられてしまひました。

かうなると土佐坊は、もうこれ迄とあきらめて、残りの十騎ばかりの味方と、一しよにそこを逃げ出しましたが、京都の町にもゐたゝまりませんで、ところもあらうに、鞍馬の奥の、貴船明神の境内に逃げこみ、ちやうどそこ

にあつた大木の、洞の中へもぐりこんで、小さくなつてをりました。けれども、偽起請を書いたぐらゐの悪者が、どうして神罰をうけずにゐられませう。こゝまで隙かさず追ひかけて来た、辨慶や、片岡や、佐藤忠信のめんくゝに、四方から狩りたてられて、たうとう生捕にされてしまひ、やがて義經の前へ引き出されて、首を討たれてしまひました。

これで、堀川の夜討は、かへつて返り討になつて、見事義經の勝になりましたが、この事が鎌倉に聞えますと、頼朝はまただまつてゐません。この上は容赦なく、公然に討手をさしむけるばかりだと、新たに北條時政を大將軍にし、畠山重忠まで無理につけて、義經征伐に向はせました。それを聞くと義經は、急いで御所へ出て、

「せつかく私が平家を滅しましたのも、ひとへに朝廷のためでござりました。しかるに兄の頼朝は、私を謀反人にいたし、わざぐ軍勢をさしむけてまゐります。この上は、いたし方がございせんから、せめて私に、四國と九州とを、御褒美に下れさたうござります。さうすれば私は、このまま京都を引あげまして、西國の方へ下りまして、兄の追手を避けたくござります。』と、申出でました。

朝廷でもこのことは、至極道理と思召されましたから、すぐにそのお許が出ました。それで義經は、急いで味方を引きつれて、西國へ下ることになりました。同勢およそ一萬五千騎、月丸といふ大船に乗つて、難波の浦を出かけました。

ところが、だんぐ漕ぎ出して、和田の岬も乗り越して、淡路の瀬戸近くなつて来たころ、不圖氣がつくと、右手の書寫山の西の方から、黒い雲が見えてきました。

義經は、それを見ると、

『これは暴風雨が出るのではないか。』
と、云ひましたが、辨慶は少し考へて、

『イヤ、少しお待ちあそばせ、あの雲のやうすを見ますと、たいの雲とは思はれません。』

『それなら、どう云ふ雲だといふのか。』

『さればでございます。この間、平家を御征伐の時、その一門の者どもの

海に沈んで亡りましたものが、今度殿様の御渡海を見て、途中に祟をいたすのかも知れません。』

と、云ひましたが、義經はあざわらつて、

『そんな馬鹿なことがあるものか。』

と、氣にも止めないやうでしたが、

『それならば御覽あそばせ、私が正體を現はしてやります。』

と、かねて用意をしてをりました、白木の弓と白羽の矢を持ちだし、舟の舳につつたつて、

『眞の暴風雨の雲ならば、これを射ても消えはすまいが、若し平家の悪靈ならば、この辨慶の放す矢に、なんで退散せずにはをらうぞ。』

と、云ひながら矢次ばやに、ヒュー／＼と射放しました。

すると不思議や、怪しい雲は、次第々々に消えうせて、間もなく空は晴れわたりましたから、義經も感心して、

『なるほど、お前は好いことを知つてゐる。』

と、褒めれば、他の者どもも、

『イヤ、辨慶殿がゐられなかつたら、どんな目にあふか知れなかつたところだ。』

と、みな禮を云つてゐました。

ところが、それから少し行くと、今度はまた、同じ山の北の方に、黒い雲があはられました。

義經はそれを見て、

『アレ、また悪靈があらはれたぞ。』

と、云ひますと、辨慶もぢつと眺めました。今度は大きな頭を振つて、

『イヤ／＼これは先刻のところがひ、眞の暴風雨の雲でございます。厄介な

ことになりましたなア。』

と、まだ云ひもをはらないうちに、はや凄まじい風がおこつて、霰まじりの

大粒の雨が、ざつと横むきに降りかゝつて來ました。

それ大變だといふので、急いで帆を巻きおろさうとしましたが、何しろ俄のことですから、思ふやうに帆が下りません。仕方がないから、中央を裂いて、風を通すやうにしましたが、もとより激しい風の上に、雨は瀧のやうに

降りかゝり、浪は山のやうに逆捲くので、さしもの大船も木の葉同様、海中を玩弄にされて、今にも轉覆りさうになりました。けれども辨慶や、四天王や、その他の家來たちは、一所けんめいになつて、この大暴雨風と戦ひまして、やつとのことでも乗りぬけましたが、この騒ぎで、供の船は、皆ちりぢりになりましたから、仕方がなしに引返へして、初めから陣を立てなほさうとしますのに、もうこの邊の大名たちは、みな鎌倉からの命令を聞いて、それ義經が來たと云ふと、いづれも軍兵を出して向つてきました。

けれども別に騒ぎもしません。片岡八郎だの、佐藤四郎だのが、眞先に進んで追拂ひ、敵の大將、豊島の冠者や、上野の判官まで、見事に射倒してし

まひましたので、敵もみな引こんでしまひました。

その間に義經は、一まづ大物の浦へ歸つて來ましたが、なにしろこの騒ぎでは、とても西國まで渡ることは出來まい。それではどうしたものであらうと、いろいろ考へました揚句、いよく道を大和へとつて、吉野の山奥に立て籠ることになりました。吉野は櫻の名所ですが、また山が深く、道が険

しいので、敵を防ぐにはちやうど好いからです。一たい、この邊の海は、前に平家征伐の時、梶原と逆艦の議論をしたところですが、ところが、ちやうどその海へ出るとき、こんな大暴雨風にあつて、心ならずも引返さなければならなくなつたのは、またふしぎな因縁ではありませんか。しかも、こんな目にあふやうになつたのも、もとはと云へば梶原

が、逆艦の議論でやりこめられた意趣晴らしに、頼朝へ讒言をしたからのことです。それを思ひあはせたら、義經も悔しかつたことでせう。
 さて義經は、いよく吉野山へ分けのぼつて來ましたが、この時まで、彼の静御前はまだ一しよに連れて來てをりましたけれども、この山は、昔から行者なぞが籠つた、神聖な山のことですから、女を一しよにおくことは出来ません。そこで、辨慶とも相談して、こゝから京都へ送り返へすことにしました。

静はまた、女でこそあれ、しつかりした、忠義な心の者でしたから、なほこの後に義經が、どんな苦しい場合にならうとも、決して側は離れまいと思ひましたが、さて何うすることも出来ません。

『それでは御機嫌よろしう……ずるぶん御身をおいとひあそばしまして、再び御出世あそばしますやう、お待ち申してをります。』
 と、涙ながらに暇乞をして、すごく都へ歸つてゆきました。

まづこれで一ト安心と、義經は味方と一しよに、しばらく中院谷と云ふところに、世を忍んで隠れてをりましたが、その間に、このことが、山の坊主どもに知れますと、また一ト騒ぎが起りました。

これはもうこの邊までも、義經は謀反人だと云ふことが、ずつと觸れわたしてありましたから、さう云ふことなら引捕へて、頼朝公のご褒美をいたさうと、かう考へたからでした。

この時はもう冬の事で、山は一面雪に埋まり、馬も通れないくらゐになつ

てをります。そこをねらつて、山の坊主たちは、一時に寺々の鐘を撞きならし、手にく薙刀、大太刀を揮つて、義經の隠れてゐる、中院谷へと押しよせて來ました。

第十回 佐藤忠信討死の巻

さてもこの吉野山には、ちやうど、あの比叡山のやうに、大きな寺が澤山あつて、そこにある坊主どもには、何時でも戦のできるやうな、荒法師達が大勢をりましたが、いま義經の逃げこんだのを知ると、我こそ討取つて手柄にしやう、生捕にして褒美にあづからうと、皆非常に意氣込んでをります。義經はまたこれを見て、高の知れた山法師めら、義經いかほど零落れても、そんな奴輩の手に負へぬぞ。いで一息に追拂つて、目に物見せてくれやうかと、思はぬこともありませんでした。それでは、かへつて騒ぎを大きくし

て、後の面倒になるに相違ない。それよりこゝは大人しく、そつと隠れて逃げのびるが一番だと、家来たちと相談の上、山法師どもの攻めよせない間に、こゝを忍んで落ちることにしました。

ところが、その中にたゞ一人、佐藤四郎忠信は、義經の前に進み出て、『恐れながら私一人、こゝに踏みとまりたうございます。』と、云ひます。

『それはまた何のためだ？』と、聞くと、

『すでに、あれほど山法師の方で、戦争の用意をいたしました以上、只の一度も手を合はせずに出ましては、彼等はいよく圖に乗つて、後を必ら

ず追駆けるでございませう。それが五月蠅うございますから、こゝは私が引うけまして、飽くまで義經公のおゐでのつもりで、彼奴等に一ト泡吹かせてやります。その間にどうぞ皆様には、巧くここをお逃げあそばせ！やがて又私も、後から追付くでございませう。』と、云ひますので、

『なるほど、これはお前の云ふとほりだ。ではこゝは委せるが、その代り、これからは、おれの鎧を着てもらはう。ずるぶん立派に働いてくれ！』と、云ひながら義經は、自分の鎧を忠信にやり、自分は忠信の鎧を取つて、こゝで着換へてしまひました。

忠信は喜ぶまいことか！ こゝで義經の鎧を貰つて、自分が義經のつもり

になつて、山法師の寄せて来るのを、一手に引うけることになりました。その間に義経は、ほかの家來をつれて、そつと裏道を脱けて出たのです。

その中に山法師どもは、いよ／＼攻めよせて來ましたが、中にも横川覺範といふのは、強力で評判の悪僧でしたが、我こそ見事義経を討つて、鎌倉の恩賞にあづからうと、黒革の鎧に身をかため、四尺ばかりの大太刀を抜いて、真先に進んで來ました。

忠信は、これを見ると、

『小癩な奴め、なぶつてくれるぞ。』

と、腹の中に思ひながらも、口ではわざともつたいらしく、

『我こそ九郎判官だぞ。ならば手柄に討つて見よ。』

と、呼ばたりながら戦ひました。

覺範は本氣になつて、忠信に斬つてかゝります。忠信は、よい加減にあしらひましたが、わざと敵はない風をして、だん／＼後へ退いて行き、やがて大きな岩の上から、二丈ばかりの谷へと飛びこみました。

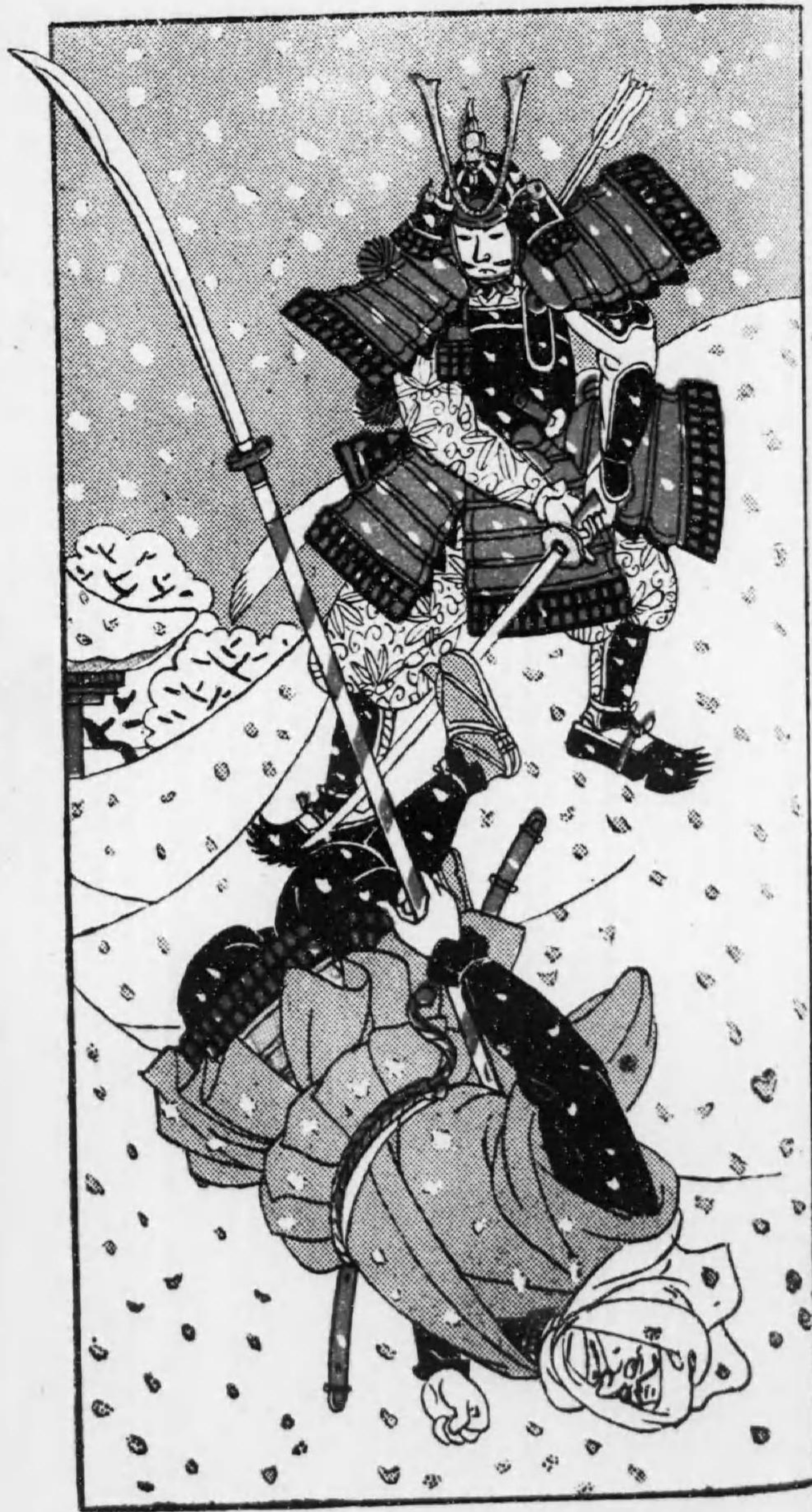
これを見ると覺範も、ついでに自分も飛びこみましたが、運悪く自分の鎧が、崖の木に引つかつたので、身體が逆さになつて落ちました。ところを待ちかまへて忠信は、見事討ち取つてしまひましたが、この體を見た、ほかの法師どもは、常から鬼神とも崇められてゐた、横川覺範でさへあのとほり……これはうつかり手を出せぬと、皆側にはよりつかず、たゞ遠巻きに攻め立てつるばかりです。

かうなると忠信はかへつて仕末にこまりました。けれども、まだ討死するにはおよばぬと、かう思つたものですから、やがて一策を案じまして、今度は近所の寺の中へ逃げ込み、わざと中から火をつけました。

もつともこの邊の建物は、もとより皆山の中のことですから、崖に添ひ峰に傳つて、いろくに入込んでをります。そこを見込んだものですから、かうして火をつけておいて、ポーツと燃え上つた煙にまぎれて、巧く廻廊や、塔ををどりぬけ、たうとう別の谷へとをどり越えて、そこから逃げてしまひました。

とは知らない山法師どもは、

『さてはいよく義経は、火の中で自害をしたな。切て骨でも拾ひ出せ。』



と、騒ぎたて、探しましたが、何所にそのやうな物がありませう。さんざん骨を折つた揚句が、つまり草臥儲けになつてしまつたのです。

こちらは、大將の義經をはじめ、十六人の落武者の面々、忠信に後をまかせて、吉野山の裏道から、櫻谷といふところへ來ましたが、時はちやうど冬のことで、あたりは一面雪に埋まり、谷の清水も、氷柱になつてをります。そこを踏みわけて行くのですから、なか／＼一トとほりの難儀ではありません。

すると辨慶は、ふと思ひついて、草鞋を逆に穿きなほし、義經はじめ皆のものにも、また同じやうにさせました。これは何のためだと云ひますと、かうして逆に足痕をつけておけば、後から追手がかゝつても、往つたはうと來た

方とを、まるで間違へてしまふからです。

案の定、この邊の山法師は、もしやと思つて義経の後を、切りに探しまはりましたが、ここの足痕が、皆逆についてゐるので、さては彼方へ行つたのではないかと、もと来た方へ引返してしまひました。

その間に義経たちは、首尾よく山を脱けましたが、まだ道は険しくて、川があつても橋がなし、ように渡ることができません。

さういふ時には、仕方がありませんから、此方の岸に生ひ茂つてゐる、木や竹に登つて行つて、その尖の曲がるひやうしに、彼岸へヒラリと飛びうつるといふ、輕業のやうなこともしたのでした。

また、腹の空いた時は、かはるく、百姓家を訪ねて、少しばかりの粟餅や、

神酒の残りなどを貰つて来て、それでやつと凌いだりしましたが、もとよりかうして逃げてゐるのには、鎧や、武器は邪魔ですから、ある谷蔭の、大木の根方に、十六人とも具足を脱ぎすて、この上は、この人数で、一しよに歩いては目に立つから、しばらく各自別々になり、來年の二月の初めに、京都で落ちあふことにしようと、堅く約束をして、別れることになりました。

それで、何れも涙ながらに、寄邊をさして落ちて行きましたが、その中に義経は、供をもつれず只一人、奈良の勸修坊といふ寺へと、身を隠しに行きました。

話變つてかの忠信は、吉野の山法師たちをごまかして、巧く山を脱けますと、まづ京都へと志ざし、ここで義経に會はうといふので、晝の間は片田舎

に隠れ、夜になるとは町へ出て、心當りを探しましたが、一向にやうすがわ
かりません。その中に吉野の騒ぎを聞いて、多分谷に落ちて死んだらうとか
また北國へ逃げ延びたとか、いろ／＼な噂をする者もありますが、どれも確
な證據はありませんから、心ならずも京都に止まつて、なほ時節を待つこと
にしました。

その間に、この年も暮れて、明年の正月の、しかも七草前のことでした。
忠信はかねて心やすくしてゐた、京は四條室町の、小柴入道の家に来てをり
ますところを、何時か鎌倉方に知られまして、不意に追手に向はれました。
忠信も、自分の油断を、いまさら後悔しましたが追付きません。
我先にと亂れ入る追手のものを、しばらく投げすて、打ち据ゑして、防い

ではみましたが、もはや武運の盡くるところと、覺悟をきめると、少しも恐
れず、追手の大將北條義時を縁の上から睨みつけて、

『高の知れた忠信一人に、業々しい何といふ狼藉だ。禁裏間近い京の町に、

夜討とは、恐多いことではないか。それよりも今忠信が、武士の手本を見

せてやるから、鎌倉殿への土産斬に、よく目を明けて見てをれやイ！』

と、云ひながら、腹をおしあけ、大聲で念佛を三十べんばかり唱へると、逆
手に持った太刀の切先を、左の脇腹にズブと立て、それをキリ／＼と右へま
はし、腹一文字に掻き切つた揚句、

『さて／＼我ながら、よく切れる刀だ。これは冥土まで持つて行くぞよ。』
と、血をおし拭つて、鞘にをさめ、ちやんと膝の下におくと、今度は手を腹

の中へ入れて、自分で臟腑をつかみ出し、今度はまた太刀を出して、『これは義經公からいたいた太刀だ。何で残して行かれやう。』と、今度は切尖を自分の口へ入れ、ウンと前にのめりましたから、それが後の頸へぬけて、見事に死んでしまひました。
 なんと凄まじい死態ではありませんか。
 この見事な最期には、追手の者も舌をまいて、誰も感心しないものはありませんでした。

一たいこの忠信は、奥州信夫の郷の者で、秀衡の鑑定で、義經に初めからつけられてゐた者です。その兄繼信は、前に八島の合戦の時、平家の大將能登守教經が、義經を狙つて射た矢の前に、自分から進んで出て、見事身代り

になつたと云ふ。忠義な勇士でありましたが、弟忠信も、兄に負けない、頼朝まれなる剛の者でした。しかもこの時忠信は、まだやうやく二十八だったのです。

そこで北條の郎等も、はじめて立ちよつて首を討ち取り、やうやく安塔の思ひをして、得意になつてこの首を、はるく鎌倉まで持つてかへり、頼朝の前に出して、なほその最期のやうすも、委しく話して聞かせましたから、頼朝も感心して、

『ア、弟は實に好い家來をもつた者だ。かういふ家來が一人をれば、ほかの百人にも優つてをる。』

と、しきりに惜しみました。が、かう云ふ首は幾日も、由井が濱で曝し物にす

るのが、鎌倉の法になつてゐましたけれど、三日目にはもう取りこんで、丁寧に葬つてやつたといふことです。

第十一回 辨慶苦忠の巻

吉野から奈良へにげてきた義経は、ここの勸修坊といふ坊さんのところに、しばらく隠れてをりましたが、ここでも人の目につき、果は鎌倉の頼朝から討手が来て、勸修坊をきびしく調べるやうになりましたから、またそこを脱けて京都へきて、六條堀河や、嵯峨のあたりに隠れてゐる間に、また前に一しよにゐた、武藏坊辨慶、常陸坊海尊、龜井、片岡、伊勢、駿河、増尾の七郎などといふ、忠義な家來にも落ちあつて、いよく今度は京都を脱け出し、もう一度、奥州の秀衡のところへ行つて、しばらく時節を待つことにし

ました。

しかし、それには、これから長い旅に、また討手が来るといけませんから、世間の人の目を晦ますために、一同風俗を變へまして、すつかり山伏に化けてしまひ、また奥方卿の君は、稚兒の姿にこしらへました。

で、まづ京都を出て、やがて江州の大津へ来ると、大津次郎といふ商人のところに、まづ宿をとりました。

ところが、この女房が、はやくもそれと悟りましたから、亭主の次郎に耳うちをして、領主の山科左衛門に告訴て、義経をからめ捕らせやうとしました。

けれども、次郎は頭をふつて、

『とんでもない事をいふ奴だ。よし、まことの義経様にしたところで、私

たちには何の恨もない方を、そんな酷い目にあはせ申すことは出来ん。』

と、どうしても聞きませんで、女房は自棄を起し、次郎が怒つて止めるのも聞かず、

『自家にゐる山伏のお方は、あれは鎌倉からのお尋ね者、義経主従に相違ないから、誰か来てはやくお捕へなさい！』

と、大きな聲で觸れあるきました。

そこで、次郎も仕方がなく、いそいで船の支度をして、

『せつかく御宿をいたしましたが、女房が氣が狂ひまして、あんな馬鹿なことを口走りますから、ひよつと御難儀がかゝるといけません。急いでお

立ち遊ばすやうに！」

と、自分もその船に乗りこんで、義經主従の者を、湖水をわたして、海津といふ、はるかかの向岸へおくりました。

義經は大そう喜び、辨慶に云ひつけて、笈の中に入れて来た、萌黄絨しの鎧と、黄金作りの太刀とを、その禮としてやりました。

さて海津から陸へあがると、近江と越前の國境にある、荒乳山へとかゝりました。ここは、大へん險阻なところですから、歩きなれない義經は、大分足を傷めました。そのために路の岩まで、ほんとの新血山にしてしまひましたが、それでもかまはず踏み越して、越前の國へ入らうとすると、其所に一の關所がありました。

關所といへば、鎌倉方の役人が、嚴重に固めてゐるところですから、もとより油断はなりません。そこでまづ二手に別れ、義經には辨慶をはじめ、常陸坊、伊勢三郎、片岡八郎などがついて前に行き、また奥方には龜井、駿河、増尾、喜三太などがお供をして、少しおくれて乗込みました。

ところが、はやくも關所の者は、それを見ると走りよつて、四方から取りまきました。けれども辨慶は驚かず、

「私どもは、出羽の羽黒山へ歸る、山伏どもでござりますが、なんの御用で御咎めになりますか？」

「羽黒山伏が、なにしにこゝを通る？」

「熊野へ參つた歸りでござるが、何故また貴公方は、そのやうに、目に角

立て、お騒ぎなさるのぢや？」

「義經公が山伏に化けて、奥州へお下りになると聞いたから、もしやとおもつて調べるのだ。」

「オ、その義經公のことなら、たしか美濃か尾張かで、もはや生捕になられたと、この間途中で聞きましたが、人ちがひされては私ども、はなはだ迷惑いたします。」

と、どこまでも白を切りますと、關の番人は顔見合せながら、

「なるほど、まことの山伏なら、搦め取るには及ばんが、それならば手形を出せ！」

と、云ひますと、辨慶はまた落つきはらつて、

「普通の旅人なら知らぬこと、私どものやうな山伏は、どこの關にも手形はいらずに、立派に通つてまゐられるのです。」

「いや、常ならば通しもしやうが、今は義經公御謀叛のため、山伏の詮議がきびしいのぢや。」

「それなら何うしろとおつしやるのです。」

「鎌倉殿へ伺ひを立て、御返事のあるまで留めておく。」

と、云はれてギョつといたしました。なほ辨慶は平氣なもので、

「それならば當分の間、こゝで御厄介になるといたしませう。イヤ、この間からのくたびれで、何所か休みたいと思つてゐたところぢや。こんな有難いことはない。」

と、云ひながら、皆々に目配して、負つてゐた笈をおろし、ゆうくとそこに坐りこみました。

この様子に、關所の者も、やうやく疑をといたと見えて、『よろしい、それでは通れ！』

と云ひましたから、一同はまた支度をして、無事に此所を通りぬけました。

これで荒乳山の關を越して、敦賀の濱から船に乗つて、奥州へ渡らうとしました。この頃はまだ二月のはじめで、海が大そう荒いものですから、船を出すことができません。そこでまた陸づたひに、木邊と云ふ山を越えて、越前の國府につき、それから平泉寺も見物し、今度は加賀の國へ来て、安宅といふところに來ました。

この近所は、富樫之介と云ふ大名の領地になつてをりますが、こゝでも、かねてより義經の來るのを、待ち構へてゐるといふ評判ですから、うつかり足を踏みこまれません。

そこで、辨慶は考へまして、なまじ大勢で通つては、また見咎められるに相違ないと、義經はじめ他の者は、別の路を先へ立たせ、自分だけは大胆にも、獨りで富樫の城へと向ひました。

その時は、ちやうど三月三日、上巳の節句の日でしたから、鞠や、小弓などを出して、面白さうに遊ぶ者もあれば、また奥の方では、笛や琴の音などが聞こえて、さかんに酒宴をやつてゐるやうです。

そこへ辨慶は、ツカ／＼と入つて行つて、わざと大聲に、

「修行者が参りました。」

と、云ひますと、「今日は手が塞がつてをります。」といつて、取りつがうと
しません。が、

『なんでも、お取次下さい。』

と、どうしても動きません。すると、家來が二三人出てきて、

『ぐづく云ふなら、掴み出すぞ。』

と、左右から腕を取りました。

辨慶は、少しも騒がず、なにを小癩なといひながら、振りはなして、撲り
とばし、引つかんでは取つて投げますと、この物音を聞きつけて、奥から主
の富樫之介は、手矛をつきながら出て來ました。

『こりや、どこの山伏ぢや?』

と、聞きますから、

『これは東大寺勸進のために、奈良からまゐつた山伏でござる。』

『それなら何故一人でお出でぢや?』

『同行も大勢をりましたが、先へ宮越へ遣りまして、私ばかり此方へ出ま
した。伯父の美作の阿闍梨は、東山道から信濃へと参り、私は讃岐の阿闍
梨と申して、北陸道を越後へと下ります。此方の勸進は如何でござりま
せう?』

と云ひますと、富樫之介はうなづいて、

『それはよろこぶお出で下さつた。』

んな迷惑をうける。惜い奴めが。』

と云ひながら、わざと義經をつかみ出して、濱の砂の上へ捻ぢ倒し、腰の扇を取りなをして、さんぐくに打ちするました。これには流石の渡守も、すつかり疑が晴れまして、もう少しも咎めなくなりましたから、ここも無事に押渡りましたが、後で辨慶は義經に向ひ、

『なんば大事の場合と申しても、現在の御主人さまを、あのやうな事いたしましたして、なんとも申譯がございません。このお罰は觀面にあたつて、辨慶のこの腕は、今に曲つたまゝ動けなくなりませう。情ないことでございます。』

と、鬼のやうな眼玉から、大粒の涙をハラ／＼とこぼして、泣いて謝罪を云

ひましたら、

『イヤ、それも忠義のためぢや。けつして悪くは思はぬぞ。かへつて禮を云はなければならん。』

と、義經は辨慶の手を取り、これも、涙にくれましたので、居あはせたほかの者まで、皆もらひ泣に袖をしぼつて、武運の末をかなしみました。

第十二回 山中出産の巻

さて義經の一行は、北陸道をだんくと下つて、いよく越後の國へとかかりました。

すると、この國の直江津に、代官權の守といふのがありました。これが、それと聞きつけると、ちか頃よい鳥が舞ひこんだものだ。一ばん自分が捕つて、頼朝公の褒美にあづからうと、浦の若者どもをかりあつめ、今や遅しと待ちかまへてをります。

ところへ、こちらは辿りついて、そこの観音堂に休んでをりますと、はや

くも四方から取りまきました。このときあいにく辨慶は、近所へ食物をあつめに出て、義經一人残つてをりましたが、もとより姿がかはつてゐますから、誰もすぐには解りません。で、ともかくも側へ進みよつて、

『お前は何者だ？』

と、尋ねますから、義經はわざとおちついて、

『これは紀州の熊野から、出羽の羽黒山へまゐる山伏です。』

と、答へました。

『ナニ、山伏？ その山伏が油断はならんぞ。あの義經や家來の者が、ちやうどその山伏にばけてゐるはずぢや。うつかり誑されて取り逃がすな。』

と、大勢が口々にのゝしります。

それには、義經も當惑しましたが、なんとかまた胡魔化して、こゝを切りぬけやうと思つてゐるところへ、ちやうど辨慶が歸つてきました。権の守はこれを見ると、

『ヤ、此奴は一癖ありさうな奴ぢや、噂に聞いた武藏坊ではないか。』

と、思ひながら、詮議にかゝりますと、辨慶はあくまで眞顔に、
『この笈の中には、三十三體の觀世音が、お入れまうしてあるのぢやから、うつかり手をかけると罰があたりますぞ。』
と、云ひました。

けれども、権の守は承知せず、

『そんなら、こゝで検めてやらう!』

『検めるなら検めて見さつしやい!』 しかし、かうしたありがたい物に、お前さん方の手をかけられると、後が汚れてもつたいたない。よく淨めてから返さつしやればよし、さもなければこの笈を、こゝに置いてゆくばかりぢや。それを承知なら、何うともさつしやい!』

かう云はれて権の守は、ちよつて考へましたが、

『いかに、検めて不審が晴れたら、後を淨めて返へしてやらう。なまじ

おいて行かれては、後のお守りに迷惑する』

『迷惑どころか佛罰で、たちまちお前さん方の目が潰れるワ。』

『なんでもよいからこれへ出せ!』

『よし、ではこれを検めさつしやい!』

と、云ひながら笈の中から、一ばん重さうなのをそれへ出しました。この中には四天王の、具足が入つてゐるのですが、扉が嚴重に閉めてありますから容易にあけることは出来ないのです。

それを權の守はうけ取つて、どうかして中を見やうとしますのに、どうしても扉が開きません。

『コレ、こゝを開けんか!』

と云ひますと、辨慶は頭をふつて、

『検めるのは其方ぢやから、そつちで勝手にあけさつしやい。私等はもつたいなうて手もかけられぬワ。』

と、笑ひながら殊勝らしく、珠數つまぐつてお經を誦へ出しました。

權の守は焦立つて、

『そんならかうして検めてやるワ。』

と、笈をかゝへてふり立てました。

すると、中は具足ですから、その金具が擦りあつて、ガタ／＼チン／＼鳴る音が、ちやうど三十三體の金佛が、たがひにあたるやうな音がしましたから、權の守は眼をまるくして、

『うむ、なるほどこれは佛さまぢやな。』

と、恐さうにそこへおいてしまひました。

『それ見なさい、いはぬことか。』

「イヤ、これはとんだ麿相をした。」
と、いまさら頭を掻くばかりです。

「それでは、お疑念ははれましたかな。」

「ウン……それではやつぱりほんもの、山伏かな。」

「もとより、まぎれもない山伏で、その中はほんもの、佛様ぢやが、さつきから詮議だてして、大分御尊體が汚されたやうぢや。どうぞ立派に浄めてください！」

「浄めるとは、どうすればよいのぢや？」

「まづ御供物として、檀紙百帖、白米が三石三斗、玄米が三石三斗、白布百反、紺布百反、黄金が五十兩。」

「エッ？？」

「まだそのほかに、鷲の尾百枚、馬七疋、荒薦百枚、これをそろへてお出しなされ！ さすればこちらで浄めて進せる。」

と、云はれて權の守はいよ／＼驚き、

「これは途法もない高い浄め料ぢやな。もそつとまけてくれまいか。」

「いやならば是非におよばず、しよせん汚れたまゝの笈は、この儘負ふてはまゐれんから、しばらくこゝにお預けまをし、あらためて羽黒の本山から、強力大勢狩りもよほして、お迎ひのためにはまるまでぢやが、その時どんな面倒がおこらうと、こつちの知つたことではござらんぞ。」

と、辨慶も面白半分、かさにかゝつて威かしましたので、權の守も仕方な

く、やつと家來に云ひつけて、米三石に、白布三十反、鷲の尾羽七枚、黄金十兩、馬三疋を、しぶくしながらそれへ出させて、

『どうかこれで勘辨してもらひたい。』

と、頼みますので、辨慶は不承々に、

『しみたれた御供物ちやが、これでもないよりは優であらう。では淨の法をいたさう。』

と、勿體らしく珠數をしもんで、

『ブツ／＼カン／＼、クン／＼、ソワカ／＼／＼、オンコロ／＼の般若般若』

若心經、ムニヤ／＼／＼ポロン／＼。』

と、出鱈目の呪文を誦へますと、

『ヤレそれで助かつた、南無阿彌陀佛々々々々々々！』

と、權の守は眞面目になつて、そのまゝ引取つてしまひましたが、あとで辨慶はほかの者と、顔を見あはせて失笑しました。

さて、これで直江津も、無事に通ることが出来ましたから、今度はこゝから船に乗つて、海路を出羽へ渡らうとしました。

ところが、途中で海が荒れて、思ふやうに進むことが出来ず、やうやく越後の寺泊に着いて、それからまた陸を行了きました。

これからは濱傳ひに、出羽の國へ行かうとすると、また念珠が關といふ關所があつて、こゝでも嚴重に見張つてをります。

辨慶はまた考へて、なにごとにも用心第一、油断は大敵と思ひますから、わ

ざと義經に大きな荷物を負はせ、自分は杖をもつてそのそばに附添ひ、
 『こりや歩かんか、なにを愚圖々々する。』
 と、口汚くしかりつけて、杖で擲る真似をしながら、その關へかゝつて來ました。

これを見ると、關守の役人も、つひその手に誑されて、かへつて氣の毒に思ひ、

『まア／＼そんな手荒な事せずと、すぐ通してやるからいいではないか。』
 と、造作なく木戸を明けてやりました。

そこで、無事に出羽の國へ來ました。それから秀衡のゐる陸奥の國までは、もう程もなくなりましたが、その途中の龜割山まで來ると、また困つたこと

がおこりました。

それは義經の奥方が、こゝに産氣づいたのでした。

この奥方は、卿の君といつて、京都を出るときから義經について、途中の難儀も一しよにして來たのですが、かねて妊娠であつたのが、たうとうこの山の中で、蟲がかぶつて來たのでした。

これには流石の辨慶も、大いに面喰ひしましたが、とりあへず大きな木の下に、敷皮で産所をこしらへ、これへ卿の君を横にしましたが、もとより産婆などよぶことは出來ません。荒くれ男が代りあつて、腰をさすつたり、背を撫でたり、一所けんめいに介抱しました。

その中に卿の君は、腹の痛みがますますはげしく、今にも息の絶えるばかり

りになりましたが、それでもやつと汐時が来て、オギヤアと勇ましい聲がしたかと思ふと、りつばな男の子がうまれました。

辨慶はとりあへず、谷川の水で産湯を使はせ、篠懸の布を産衣にかへて、大切に抱へて義經に見せますと、義經も大そう喜びましたが、世が世なら立派な御殿で、盛んなお祝もあるべき身を、今はこんな山の中の木の蔭で、獣も同様な、浅ましい誕生とは、なんたる情ないことであらうと、また涙にくれるばかりです。

けれども、辨慶は嬉しさうに、

『ちやうどこゝは龜割山、それに鶴の千歳をなぞらへ、御名は龜鶴さまと遊ばされました。』

と、縁起を祝ひまして、大切にして連れることにしましたが、なにしろ山伏の道中には、嬰兒はあまり似合ひません。

それで人目にふれないやうに、晝は笈の中に入れて行きますのに、不思議ややすくと眠つて、つひに一度も泣聲をたてず、やがて三日ばかりして、目ざす秀衡の領分の、陸中の國へと入つて來ました。

けれども不意に乗りこんでは、さぞ秀衡が驚くであらう。殊にその後時も經つたから、その様子も解らぬので、まづ龜井の六郎と、伊勢の三郎とを使にたて、先に平泉へと遣りました。平泉はいふまでもなく、秀衡の住んでゐるところです。

第十三回

泰衡變心の巻

さて藤原の秀衡は、思ひがけない珍客の、義經がたづねて来たのですから大きに喜び、長男の泰衡を出迎ひにたて、義經はじめ奥方、若君、武藏坊、四天王の面々を、ていねいに自分の邸へ迎へました。が、もとより大切な客人ですから、ふだんはめつたに人を入れない、月見殿といふ離れの御殿を、取りあへず一同の住居にあげ渡しました。

しかし、聞けば義經は、平家を見事に討亡ぼして、大した功勞があるにもかゝはらず、兄頼朝の憎しみをうけて、今はこのひろい日本中に、やすく

と居るところもなく、仕方がなしに秀衡をたよつて、ほるく奥州まで落ちて来たといふのですから、秀衡も大そう氣の毒に思ひ、

『その中また時節がまゐつて、御運の開けることもありませんから、それまでは御不自由でも、こゝで御辛抱なさつて下さい。』

と、やがて大工どもに云ひつけて、衣川に新しく御殿をつくり、これへ義經を入れることにして、なにくれと親切に世話をしましたから、義經もこゝへ来た效があつたと、初めて安堵のおもひをしました。

ところで、また思ひ出すと、屋島で自分の身代になつた、兄の繼信や、また吉野でひとり踏みとまつて、義經を無事に落ちさせ、後に京都で討死をした、弟の忠信の、忠義な佐藤兄弟は、みなこの奥州から出た者で、その母

もまだ生きて居るといふことですから、ある時その家へ訪ねて行つて、ねんごろに悔みを云ひ、なほ二人の者の息子にも命けて、これに元服をさせてやり、その名前も自分で選んで、繼信の子は義信、忠信の子は義忠と呼ばせました。

二人の子供は喜んで、初めて烏帽子を着けて、義經の前へ出ますと、義經はそれ／＼盃をやつて、今日の賀をいつた揚句、

『お前方のお父さんたちは、實に立派な武士であつたぞ。』

と、繼信のことや、忠信の話を、くはしく話して聞かせまして、

『お前方もお父さんの子だから、お父さんに負けないやうな、立派な武士になるのだぞ。』

と、云ひながらめい／＼に、小櫻絨と卵の花絨の鎧を、一組づゝ祝つてやりました。夫はその親たちの忠義に酬ひた、義經の志ですが、世が世なら二人とも、すぐに一方の大將にでも、取りたてゝやることが出来ると、義經も心の中には、さぞ口惜しく思つたことでせう。

しかるに、また生憎なことには、義經がこゝへ來てから、まだ三年とも経たないのに、頼む藤原の秀衡は、重い病氣が原になつて、たうとう死んでしまひました。

が、その臨終といふ時に、秀衡は自分の息子たちを、枕もとにまねぎよせ、

『ア、私はいよ／＼今度は駄目ぢや。これも定まる約束ごと／＼おもへば、いまさら命を惜しいとはおもはんが、たゞ如何にも心にかゝるのは、せつ

かく私をたよつてござつた、あの義經殿の身の上ぢや。……ついてはお前方に云つておくことがある。』

と、せつない息を次ぎながら、

『今私が死んでしまへば、その中には鎌倉から、きつと義經殿を討ち取れといふ、厳しい御沙汰が出るに相違ない。そしてその褒美には、新たに常陸の國を下ださるとあらうが、しかしそれにはうかとは乗れぬぞよ。……私ら一家には、出羽奥州で十分ぢや。なまじ慾を渴かしては、かへつてひどい憂目を見やう。……なにをいふにも頼朝といふ人は、現在の肉身の弟御さへ、あのやうに邪魔にされるくらゐぢや。まして私らの眷族の者が、なまじ威勢を振はうとすれば、きつと祟が来るに相違ない。それぢやによ

つて、たとひ鎌倉からお使者が來ても、決していふ事を聞いてはならん。場合によつてはその使者を、切つて棄て、も苦しくない。それで頼朝公が腹をたて、軍勢を繰り出して來られても、こゝ迄は道も遠し、途中に要害はいくらもある。白河と念珠との關所をかためれば、容易にせめて來られない。ことに味方には義經殿といふ、天晴大將がゐらしやるから、たとひ天下を敵にしても、けつして恐れるには及ばぬ事ぢや。かへすくも義經殿を、魚末にしてはあひならんぞ。これが私の遺言ぢや。どうぞこれを忘れてくれるな!』

と、心を籠めていひ聞かせまして、やがて息を引取りました。この事が、義經に聞えますと、取るものも取りあへず、飛ぶやうにしてこ

の場へかけつけ、

『ア、秀衡殿！ なせ死んでくだされた。父義朝には二歳で別れ、兄はありながら會ふことも出来ず、養親とも伯父御とも、頼みにおもふのは貴君ばかりでしたに、かうしてまた置いて行かれるとは、なんといふ情ないこととでせう。』

と、流石の義經も我をわすれて、死骸に取りつきながら泣きました。これはもとより左もありさうな事です。

そこで義經は、秀衡の兄弟泰衡、二男基衡、その他の人たちと一しよになつて、まるで自分の父親さまが死んだ時のやうに、ていねいに葬式を営みまして、後はその息子たちとも、兄弟同様に交際ひきました。

ところが、悪い時には悪いことが起るもので、その後三月四月とたつと、

またそろ／＼魔がさして來ました。

一たい、泰衡といふ人は、秀衡の總領ではありましたが、所謂甚六の仲間と見えて、あまり智慧はなかつたのです。それに引かへて、弟の基衡は、泉の冠者とも呼ばれまして、よく義經とも氣の合つた、立派な人間でありました。

それで、平生からこの二人は、あまり仲が好くなかつたのです。するところ時泰衡の家來が、夜半にそつと泰衡のところへ來て、

『殿様に申上げます。泉の三郎様はこの間から、ない／＼義經様と心をあはせ、殿様を無いものにして、この奥州の天下をば、御自分御一人で占め

ようとなすつてゐらつしやいます。御油断あそばしてはなりませんぞ。』
 と、さも忠義めかして云ひました。

これを聞くと泰衡は、もとよりあさはかな男でしたから、はやくもその口
 車ぐるまにのせられ、

『これは實に怪しからん話だ。よし、先方にさういふ企畫があるなら、此
 方にも了簡があるぞ。』

と、急いで戦の用意をして、ちやうど二月廿一日、秀衡の法事をする筈であ
 ったのを、そんなことは御留守にして、不意に基衡の邸へ夜討にかゝりまし
 た。

泉三郎基衡は、もとより身に覺のないことですから、戦の用意などはして

ありません。可あいさうに冤の罪で、たうとう兄に攻め殺されてしまひまし
 た。

この有様に義經は、もううかくしては居られぬ。秀衡の後もかうなつて
 は、もはや頼みにならぬばかりか、かへつて自分の身も危いと、はやくも氣
 がついたものですから、急いで辨慶とも相談して、まづ九州にゐる菊地、緒
 方などの、大名どもを加勢に呼ばうと、その手紙をかきまして、これを駿河
 の次郎に持たせて、急いで九州へと向はせました。

ところが、これがどうして知れましたか、駿河の次郎が京都まで来たところ
 で、鎌倉方に捕まつて、すぐと頼朝の所へ引立てられました。
 その時頼朝は、義經の手紙を見ますと、また大きに腹をたて、

『おのれ憎い義經め！かねて彼の秀衡を頼んで、身を潜めてゐるとは聞いたが、かやうな手紙を諸國へ出して、味方を集めようとするからには、いよく謀叛をする氣だな。よしそれならば容赦はならん、片時もはやく討取つてしまへ！』

と、すぐにも軍勢を繰り出さうとしました。するとまた例の梶原が、その側から口を出して、

『イヤ、しばらくお待ちくださいまし。一體あの義經といふ方は、古今に珍らしい戦上手の方でございます。それに奥州は道も遠く、要害堅固な所も澤山ございますから、尋常に戦を遊ばしましては、日本中の勢をよせてかゝつても、容易に形はつきまますまいと存じます。』

『それだといつて打棄ておいたら、敵はいよく攻め上つて来やうが。』

『イヤ、その御心配にも及びますまい。』

『そんならどうすれば可いといふのだ？』

『さればでございます。あの奥州も秀衡の頃には、威勢も恐しうございましたが、今は伴泰衡の代になつて、大分人氣が落ちてゐるやうでございます。ことにあの泰衡は、あまり伶俐の者とも思へませんから、まづ彼のを甘言をもつて手なづけ、その手によつて義經公を討たせ、その後これを科に云ひたて、泰衡奴をもお討になれば、出羽奥州はこの序に、見事御手に入ると申すのでございます。』

と、巧く智慧をつけましたから、頼朝もなるほどと思ひまして、すぐに泰衡

へ使をたて、

『お前のところの義経は、謀叛の者だから、直ぐに討ち取れ！ その褒美には、常陸の國を、新たに領分に取りらせるぞ。』

と、云ひこませました。

これはちやうど秀衡が死ぬ時、くれぐれも遺言して行つたことですが、泰衡はもうそれを忘れて、かへつて頼朝の言葉に乗り、

『畏まりましたでございます。』

と、快く承知して、直ぐに支度にかゝりましたが、もとより不意にかゝるのですから、敵に氣取られてはならぬといふので、まづ公然は狩といふことにして、にはかに軍勢を繰り出しました。

第十四回 辨慶往生の卷

時は文治五年の春、かねて企んでゐた泰衡は、義経に油断をさせておいて、不意にかゝつて討取らうといふので、表面は狩に出かけることにしました。狩といつても今の人のやうに、銃一挺犬一匹で、身輕に野山を駆けあるくのではなくありません。かういふ大名たちになると、大勢の家來や、澤山の從者を

つれて、まるで戦に出るやうな支度です。

その時義経は、もとより神ならぬ身の、さういふ企があるとは知りませんから、誘はれるまゝ一しよになつて、自分も狩に出ようかと思つてゐたくら